開発こうほう

Hokkaido Development Association

共に北海道の未来を創る

April.2026
4月号

北海道新時代
令和7年度　地域活性化活動発表会

シリーズ　北海道の博物館・郷土資料館
北海道の博物館・郷土資料館シリーズ開始に当たって
楽しみ方は1つじゃない

シリーズ「地域コミュニティ」
北海道における地域コミュニティの活性化に向けて

地方創生
北竜町総合戦略2025

ガストロノミックツーリズムin北海道
「日高」

ほっかいどう学
北海道のキタキツネ

開発こうほう
Hokkaido Development Association
April.2026
4月号
NO.752

『五稜郭と桜』（『北海道遺産フォトコンテスト2019』応募作品）
撮影者　　瀧本　浩貴　様
北海道遺産　　「五稜郭と箱館戦争の遺構」

北海道遺産
Hokkaido Heritage

箱館戦争は1868（明治元）年秋の旧幕府脱走軍の侵攻に始まり、翌年春の新政府軍の反撃により、五稜郭開城で終わった。戦いは道南一帯に及び遺跡や遺構が随所に見られる。榎本武揚率いる旧幕府脱走軍が上陸した鷲ノ木、蝦夷島臨時政権の根城となった五稜郭や急ぎ造成された四稜郭、猛攻を受けた福山城、開陽丸が沈没した鴎島沖、新政府軍が上陸した乙部海岸、激闘の二股口、土方歳三が戦死した一本木関門など、戦いのすさまじさを偲ばせる。

Contents

北海道新時代
令和７年度　地域活性化活動発表会
各地で展開する地域活性化活動をサポート …… 1
中川　俊也

シリーズ　北海道の博物館・郷土資料館
北海道の博物館・郷土資料館シリーズ開始に当たって … 7
（一財）北海道開発協会開発調査総合研究所

シリーズ　北海道の博物館・郷土資料館《１》
楽しみ方は１つじゃない　ニセコ町・有島記念館 … 8
河野　紫杏

シリーズ「地域コミュニティ」《９》
北海道における地域コミュニティの活性化に向けて
ー地域課題の解決に向けた新たな共創の取り組みー … 10
有村　幹治

地方創生
北竜町総合戦略2025 …… 14
北竜町まち未来戦略課

ガストロノミックツーリズムin北海道
～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～　第８話
「日高」 …… 19
遊佐　順和

「ほっかいどう学」第53回
北海道のキタキツネ
～「共生」の真の意味～ …… 23
池田　貴子

わが村は美しく－北海道　未来へつなぐ　第62回　－沼田町－
野菜を愛して30年 …… 27
沼田町産直グループ　愛菜ママ

地域おこし協力隊　第55回　－鹿追町－
ゆっくり、じっくり、マンゴーと歩く
～鹿追町で見つけた私の新しい日々～ …… 28
金澤　里奈

すずきもものほっかいどうスケッチ　第54回
美味しいお米と豊かな自然、そして素敵な人たちが集う町 … 30
すずき　もも

「活動報告レポート」－広尾町－
地域の営みを「体験」としてひらく－広尾町・ピロロツーリズム推進協議会の活動と、旅宿「あわい」－ …… 32
ピロロツーリズム推進協議会

寄稿
北海道の観光活性化に向けて
－開拓ヒストリーの絆を生かした姉妹都市交流の拡大－ … 34
小長井　宣生

お知らせ
令和８年度　地域活性化活動助成募集のご案内 …… 38
「コンクリート供試体確認版」のご案内 …… 39
お知らせ …… 40

令和7年度 地域活性化活動発表会
各地で展開する地域活性化活動をサポート

（一財）北海道開発協会 開発調査総合研究所
副参事　中川　俊也

（一財）北海道開発協会では、非営利の市民団体が行う地域活性化活動に対して平成14年度から助成を行っており、これまで160件の活動に支援を行ってきました。これらの活動がさらに発展していくよう平成20年度から助成を受けた団体の方々が活動成果などを発表し、参加者同士が地域づくりについて自由な意見交換をしていただく「助成活動発表会」を札幌市内で、令和７年12月２日に開催しています。今回の報告では、令和６年度に助成の対象となった３団体の成果の紹介や、地方の共創について意見交換を行いました。

その模様を取りまとめたので、以下に報告します。

【第１部　助成活動団体による活動報告】

「マンション管理におけるコミュニティ活動の活性化支援事業」

一般社団法人 北海道マンション管理士会

菅野　英雄 氏

北海道の都市部において、マンションはもはや単なる「集合住宅」ではなく、地域づくりにおいて極めて大きなボリュームを占める存在であり、町内会や自治会と並び、地域の一員としての役割と責務を担っています。マンションの管理組合が内部のコミュニティを形成し、地域との連携を深めることは、地域の防災力や活性化に直結しています。

北海道マンション管理士会は、マンション管理適正化法に基づき、管理組合の運営を支援する専門家集団です。私たちの取り組みは、管理運営の根幹を支える「コミュニティ形成」の支援事業になります。

現在、道内のマンションは「建物の老朽化」と「住民の高齢化」という二つの課題に直面し、札幌市内のマンション約3,830棟のうち16％が築40年を超え、旭川市や函館市では、その割合が５割以上に達しています。さらに深刻となるのが居住者の高齢化です。特筆すべきは、道内居住者の「永住意識」の高さにあります。全国平均の約６割に対し、北海道では約７割がマンションを「終（つい）の棲（すみ）家」と考えています。積雪寒冷地である北海道では、除雪の負担や利便性を考え、戸建

てから都心のマンションへ住み替える高齢者も多くいるためです。

マンションの資産価値を守る修繕やルール変更には、住民の「合意形成」が不可欠ですが、役員のなり手不足や住民の無関心は、管理不全を招きかねません。この合意形成の土壌となるのがコミュニティです。

札幌市中央区は、世帯の４割以上がマンションに住んでいます。住民同士が顔見知りになり、挨拶のできる関係を築くことは、トラブル防止だけでなく、災害時の共助やスムーズな管理運営を可能とします。「良好なコミュニティが自らの財産を守る」という意識の醸成こそが、維持管理の根幹です。

2026年４月施行の改正区分所有法では、所在不明者の決議除外などの仕組みが整備されましたが、最後に管理を動かすのは居住者の意思です。私たちは「マンションのコミュニティなしに未来はない」という信念のもと、今後も支援を継続し取り組みます。

「Nチャレンジ」を活用した空知地域の活性化事業

NPO法人 北海道教育大芸術・スポーツ文化研究所

鈴木　哲平 氏

北海道教育大学岩見沢校では、芸術・スポーツビジネス専攻の教員を中心に、研究成果を社会に還元するためのNPO活動を展開しています。設立以来、「遊びと学びのコンテンツ開発」「体験環境の整備」「人材育成」を柱に、「都市型養蜂」プロジェクトや教育用カードゲームの開発など、地域特性を活かした独自の取り組みを推進してきました。

今年度、私たちが注力したのが、道の駅を拠点とした「Nチャレンジ」事業です。 Nチャレンジとは、小学生を対象に開発された、アジリティ（敏捷性（びんしょうせい））を楽しく測定するための新種目で、７ｍ×３ｍのスペースに設置されたコースを走り、そのタイムを計測します。コースの形状が「Nの字」であること、そして北海道の「North」の頭文字から命名されました。

最大の特徴は、高精度な光電管を用いて複合的な動作を数値化できる点です。測定時間はわずか10秒。運動の得意不得意に関わらず、参加した児童の９割以上が「楽しかった」と回答するほど達成感が高い種目となっています。

2024年のプロジェクトでは、道内各地の「道の駅」で展開しました。

奈井江町の道の駅「ハウスヤルビ奈井江」では、芝生広場で開催し、プロバスケットボール選手によるイベントや保護者向け体力測定を併設しながら、多世代交流を実現しました。

三笠市の道の駅「三笠」では、降雪の影響を考慮し、屋内施設で実施。詳細なフィードバックを行うことで、子どもたちが自ら課題を見つけ、挑戦を繰り返す姿が見られました。

2025年も引き続き、道の駅でプロジェクトを実施しています。雨竜町・恵庭市で行い、大学生が運営をサポートし、学生自身の学びの場としても機能していました。

今後の課題は、当法人の強みである「アート」や「音楽」とスポーツをさらに融合させることだと考えています。単なる競技イベントに留（とど）まらず、芸術的要素を取り入れた包括的なプログラムを開発し、住民が「誰でも、いつでも、気軽に」参加できる持続可能な仕組みづくりを推進させていきたいと思います。

「十勝における地域おこし協力隊の定着支援プロジェクト」

一般社団法人TCN（旧：とかち地域おこし協力隊ネットワーク）

中田　幹悟 氏

十勝地方には現在100名を超える地域おこし協力隊が在籍しています。ミッションは観光から教育まで多岐にわたりますが、彼ら彼女らが任期終了後も地域に留まり活躍し続けるためには、スキルの可視化と強固なネットワークが不可欠です。

2025年３月、任意団体を法人化し「一般社団法人TCN」として新たなスタートを切りました。代表をはじめ、メンバー全員が協力隊関係者で、私たちは

「OPEN」「ACTIVE」「PROGRESSIVE」を行動指針として、協力隊人材が十勝で「生活の糧」を得られる未来を目指しています。

今回、私たちが制作したのが、パンフレット『With You With Tokachi』です。当初は24ページを想定。活動の拡大に伴い最終的には60ページとなりました。冊子の特徴は、企画から撮影、デザイン、執筆まで、すべて協力隊関係者の専門スキルを結集して制作した点にあります。

リアリティの追求では、現役・OB・OG計12名へのインタビューを通じ、移住の美談だけでなく、活動の苦労やキャリア変遷といった「生の声」を重視しました。

スキルの可視化では、誰がどのようなスキルを持っているかを明確にし、民間企業や行政からの仕事の発注に繋（つな）げる「名刺」としての機能を持たせました。

協力隊としての任期中は、行政による支援を受けて活動をしますが、卒業後の生活まで保証するものではありません。私たちは「自分たちで事業化を進める」という自律的な姿勢を重視しています。パンフレットをきっかけにお仕事の依頼をいただくなど、新たな事業展開もみられるようになりました。

今後は組織規模を拡大し、制作ノウハウを活かした収益化を図ることで、協力隊が地域に根ざすためのインフラ整備を目指し、活動を継続したいと考えています。

【第２部　意見交換】

（講演）「小さなまちで地域の誇りを糧としたまちづくりに取り組むこと」

一般社団法人 清水沢プロジェクト代表理事　佐藤　真奈美 氏

（歴史的転換点と助成事業）

佐藤　真奈美 氏

私たちは令和元年に開発協会から助成をいただき、夕張市清水沢地区を拠点として活動を続けています。申請時、夕張市石炭博物館の模擬坑道で火災が発生し、鎮火まで２週間を要するという事態が起きました。私はこれが地域の歴史的転換点になると直感し、締め切り当日に申請書を書き直して提出したことを今でも鮮明に覚えています。

助成金は主に、炭鉱遺産の保存活用、地域資源の利活用、拠点となる「清水沢コミュニティゲート」の運営、そしてデジタルアーカイブ「みんなでつくる夕張の記憶ミュージアム」の構築に活用いたしました。

本日は、小さな地域でまちづくりを進めるための有効な手法である「エコミュージアム」の考え方と、地域の「誇り」をどう次世代へ引き継ぐかについてお話しさせていただきます。

（夕張の現状と清水沢地区）

夕張市はかつて石炭産業で栄え、最盛期には12万人の人口を擁しましたが、現在は約5,800人と20分の１まで減少しています。2006年の財政破綻を経て、現在は2026年度末までの借金返済を続ける財政再生団体となっています。

活動拠点である清水沢は、炭鉱開発と共に形成された地区です。かつての社宅街には風呂のない公営住宅が並び、地域の中心にある共同浴場が住民の交流を支えてきました。この浴場は残念ながら今年８月に閉鎖されましたが、炭鉱会社が建設した「生きている産業遺産」として非常に貴重な存在です。私たちはその価値を守るため、現在も市と対話を続けています。こうした歴史の厚みが、物語性のある景観や文化を形作っています。

（清水沢エコミュージアム構想）

2016年に法人化した清水沢プロジェクトの核となるのが「エコミュージアム」構想です。これは地域全体を「屋根のない博物館」と見なし、住民自身が地域の宝を見つけ、磨き、発信する仕組みです。

佐藤代表理事による講演の様子

夕張は歴史的に、炭鉱会社や行政といった「大きな力」に依存してきた側面があります。しかし、財政破綻を経て自分たちでまちを支えなければならなくなった今、住民が主役となるエコミュージアムの考え方は非常に重要だと考えています。人手が限られる中、地域の外の人々と出会い、互いに尊敬し合う関係を築きながら共にまちを作る。この環境づくりこそが私たちの役割になります。

（炭鉱遺産の活用と対話の場）

具体的な活動の一つが「旧北炭清水沢火力発電所」の活用です。空知最大級の炭鉱遺産であるこの建物は、かつて解体の危機にありましたが、2011年に開催した現代アート展をきっかけに管理者の意識が変わり、解体が停止されました。現在は「見学事業」として、一対一の対話を重視した案内を行っています。単に観光客を集めるのではなく、ここが何であったか、今後どうあるべきかを共に考える場として運営しています。

また、採炭時の捨石が積み上がった「ズリ山」の整備も15年続けています。有志で階段を設置し、毎年メンテナンスを行うことで、今では地域屈指のビュースポットとして認知されるようになりました。

（拠点の運営と次世代への継承）

2016年からは、夕張市から無償貸与された旧炭鉱住宅を「清水沢コミュニティゲート」として運営しています。ここはアーティスト・イン・レジデンスの拠点であり、表現者などが滞在制作を行う場です。また、昨年からは「夕張の記憶ミュージアムルーム」を開設し、収集した記憶をリアルに展示しています。

特筆すべきは、ここで夕張高校の生徒２名をアルバイトとして雇用している点です。資料整理や来客対応を担う彼女らは、かつて私たちが主催した子ども食堂やイベントに参加していた子どもたちです。まちづくりの現場が彼らの「仕事」になり、一緒に働く仲間になれることは、活動を続けてきた大きな喜びです。

さらに、2015年から毎月開催している「まちあるき」では、参加者が自ら資料を作って説明し始めるなど、主体的な関わりが生まれています。私たちは、ただ人を集めるのではなく、地域の尊厳を守る「門番（ゲート）」としての役割も意識しています。過度な観光化や、無遠慮なメディアの視線から地域を守り、住む人の誇りを担保することが不可欠だからです。

（地域の誇りを糧に）

今年、私たちの取り組みは「住まいのまちなみ賞」※1で全国３位の評価をいただきました。理不尽な状況に耐えてきた地域が、客観的に「褒められる」機会を作りたかったという思いから応募しました。祝賀会には、多世代の住民が集まり、地元のお菓子屋さんにケーキを作っていただき、各テーブルに分かれ茶話会で未来を語り合いました。

小さなまちで「地域の誇り」を糧に活動するということ。それは、歴史という文脈から誇れるものを見つけ出し、外の人々と尊敬し合える関係を築き、まちづくりが仕事になる姿を子どもたちに見せることだと考えています。

「地域活性化」という言葉は、縮小し続ける夕張には馴染（なじ）まないかもしれません。しかし、たとえ小さくなっても、今ここにいる人たちが幸せであるための模索を止める必要はありません。これからも歴史を糧に、市民が誇りを持てる地域づくりに邁進してまいります。

【パネラーによるディスカッション】

目黒（コーディネーター：開発調査総合研究所）

本日、熱意ある活動をされている皆様のお話を聞き、地域づくりの思想・哲学として大変貴重な学びを得ました。ここからは、令和６年度の活動団体の代表者の皆様と佐藤様、さらには会場の皆様も交え意見交換を進めさせていただきます。はじめに佐藤様より第１部の活動報告について、コメントまたはご質問を伺いたいと思います。

パネラーとのディスカッションの様子

※1　住まいのまちなみ賞
一般財団法人 住宅生産振興財団が主催する「住まいのまちなみコンクール」において贈られる賞。地域住民が主体となって良好な住環境（まちなみ）を維持・管理・運営している活動を表彰し、支援する制度。

《各活動報告を深掘り》

佐藤　私自身、令和元年度に助成採択をいただきましたが、その際の活動発表会で各活動報告を聞いて感銘を受けた記憶が今も強く残っています。

まず、北海道マンション管理士会のお話について、マンションを一つの「コミュニティ」と捉える視点は、現代の地域づくりにおいて不可欠です。報告ではテキストを作成されたとのことでしたが、具体的にどのような秘訣や活動方策を盛り込まれたのか、非常に興味があるところです。

（マンションコミュニティと高齢化の現実）

菅野　テキストは、約30ページにわたり、コミュニティの形成と管理組合への寄与についてまとめています。現在、築40年を超えるマンションでは70代以上が55％を占めるなど高齢化によって、「老人の徘徊（はいかい）」や「孤独死」が現実の問題となっています。

テキストを片手に回答する菅野氏

特に男性は退職後に地域との繋がりを失いやすく、孤独死が発生すれば資産価値にも影響します。対策として、管理人がインターホンを通じて毎日声掛けを行い、応答がなければ安否確認をする「声掛け運動」を導入している事例などを紹介しています。中には、長年親身に接してくれた管理組合に財産の一部を遺贈した独居男性の事例もあります。コミュニティこそが、これらの問題を未然に防ぐ鍵だと考えています。

テキストは、セミナー参加者に配布したため、現在は在庫がほとんどない状況です。

佐藤　北海道教育大芸術・スポーツ文化研究会の活動ですが、地域に大学がある強みを活かし、「Nチャレンジ」の統計データを研究としてどのように地域にフィードバックされていますか。

（運動データの活用と全世代への展開）

鈴木　「Nチャレンジ」は、研究ベースでスタートしています。岩見沢市内の各小学校で10年間にわたり蓄積したデータベースを基に児童が自分のタイムを過去10年のデータと比較できる仕組みです。このシステムが運動能力向上に有用であることは、海外のジャーナルでも公開・評価されています。

今後の課題は、この楽しさを未就学児や大人、高齢者へ広げていくことです。大人が参加することでコミュニティがどう変化するのか、新たなテーマとして取り組みたいと考えています。

佐藤　一般社団法人ＴＣＮの活動において、地域おこし協力隊のマネジメントや卒業後のキャリア支援が重要なテーマで、行政との調整にご苦労も多いと推察します。自律的な姿勢で活動されている点は、非常に素晴らしく、楽しい取り組みだと感じました。

（協力隊の自立と行政との距離感）

中田　地域おこし協力隊は、行政による任用期間が終わり、「卒業後の生活の糧をいかに十勝で形成するか」を重視しています。行政に活動の周知などは行いますが、基本的に自分たちで事業化を推進しています。地域おこし協力隊の定着率を高めるには、自分たちで環境を整えることが重要だと考えています。

《フロアを交えた意見交換》

目黒　ここで、フロアからもご質問をお受けしたいと思います。

Ａ氏　賃貸アパートでも住民同士が無関心なことや、管理会社の対応などに課題を感じることがあります。マンション管理士会が作成されたテキストは、今後「アパート版」や、ホームページによるテキストの公開を検討されてはいませんか。

菅野　賃貸と分譲では権利関係が異なりますが、共同住宅としての問題の本質は同じです。北海道マンション管理士会では、電話や面談での相談窓口を設けています。賃貸特有の契約条件なども踏まえ、お答えできる範囲で協力させていただきます。

Ａ氏　私の父も元炭鉱マンでした。炭鉱の記憶が薄れゆく中、その子どもや孫が、今後、清水沢プロジェクトの活動協力として何かできることはありますか。

佐藤　お願いしたいのは、家族の中で語られた記憶を書き留め、どこかに託していただくことです。家族にしか言えないこと、あるいは家族だから言えないこともあります。また、写真や遺品を捨てずに残していた

だくことが、次世代へ歴史を繋ぐ最も大切な力になります。

B氏　私も地域おこし協力隊出身で、TCNの活動報告を興味深く聞かせていただきました。今後の展望として、最終的なゴールをどのように設定されていますか。

中田　ゴールは「協力隊の十勝への定着」です。やりたいことを実現できる環境を私たちが作り、それが結果として彼らの生活の糧になること。そのインフラになることが目標です。

フロアの質問に回答する中田氏

《地域における「文化・スポーツ・暮らし」の価値》

目黒　貴重な議論をありがとうございます。私からも今回の取り組みに関連したお話を伺います。

菅野様、築40年を超え耐震基準に不安があるマンションの理事長から「建て替えるべきか」と問われた際、どうのように助言をされますか。

菅野　建て替えは、極めてハードルが高いのが現実です。全国的にも成功例は少なく、札幌市内では、立地条件が良く、余剰容積（さらに高く建てられる余地）がある場合に限られます。現在は一戸あたりの負担が2,000万円を超えることも珍しくありません。

我々としては「いかに長く使うか（長寿命化）」を重視します。鉄筋コンクリートは適切な修繕を行うことで100年以上持ちます。将来の解体費まで見据えた「長期マネジメント」と「ビジョン」を持つことが、最も大事なことだとお伝えしています。

目黒　鈴木様、スポーツやアートが地域コミュニティにおいて果たす可能性について伺います。

鈴木　スポーツやアートは、コミュニティづくりの「コンテンツ」です。私が地域で行っている介護予防体操には120名の高齢者が集まります。彼らの目的は運動そのものより、「おしゃべり」や情報交換です。最近、健康をテーマに「ウェルビーイング」という言葉が使われますが、健康は、身体的・精神的・社会的健康すべてが整っていることが定義とされ、アートは特に精神的・社会的な繋がりに寄与します。人と人との繋がりから生まれる貢献可能性は非常に大きいと感じています。

意見交換で回答する鈴木氏

目黒　中田様、地域住民との繋がりの中で、何か具体的な成功体験はありますか。

中田　清水町の有志で行った「図書館カフェ」の事例があります。地域の人が漫画やコーヒーを持ち寄り、子どもからお年寄りまでが世代を超えてボードゲームなどで遊ぶ場所となりました。そこから「次はこんな企画をしよう」と新たな繋がりも生まれています。

目黒　開催時間も終盤に近付いてきました。清水沢プロジェクトの佐藤様には、この度「住まいのまちなみ賞」を受賞されましたが、地域住民への影響や反応はいかがでしたか。

意見交換で回答する佐藤氏

佐藤　この賞は、地域の方々の長年の暮らしや営みが評価されたものです。受賞を伝えても、住民の方は「なんで？」と驚かれていました。住民の方々は、賞のために生きているわけではなく、静かな暮らしが続いていくことが彼らにとって一番大事だからです。

行政としては、新たな街としてコンパクトにしたいと考えていますので、古い団地の暮らしが評価されたことに戸惑いがあるようです。しかし、この受賞が夕張市の歴史や文化を大切にするまちづくりのきっかけになればと思っています。新しいことをするだけでなく、今ある「小さな幸せ」を支え続ける。そのスタンスを崩さずに今後も活動を続けていきます。

目黒　「小さな幸せが続く」という言葉に、地域づくりの本質を見た気がします。本日は誠にありがとうございました。

北海道の博物館・郷土資料館シリーズ開始に当たって

（一財）北海道開発協会開発調査総合研究所

当研究所では、今月号より北海道内の博物館・郷土資料館を紹介するシリーズを開始します。

取り上げるのは、地域におけるこれまでの産業の発展の道のりや人々の暮らしなど、その地域のいろいろなことを学ぶため、開拓時代からのそこで使われていた道具や家財などを展示してあるような、一般には郷土資料館と称されるような施設です。それ以外の呼称を採用しているところもありますが、このシリーズで扱う施設は、総称して「博物館・郷土資料館」と呼ぶことにします。

ところで、ここでいう「博物館」ですが、その中にはいろいろなものがあります。たとえば、博物館法という法律上の定義からは、動物園、水族館、美術館なども含まれることになります。すなわち、同法第二条は、＜博物館とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集、保管、展示して人々の利用に供し、その教養やレクリエーション等に資するための事業を行うとともに、これらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関のこと＞という旨の規定になっているのです。したがって、動物園や水族館で見られるのは、「自然科学に関する資料」ということになります。生き物が資料であるとされているわけですが、あくまでも法律上の位置づけです。

もっとも、博物館法上の「博物館」となるには、登録が必要で、ほかに、同法の規定では博物館相当施設というものもあります。同法によらない博物館などは、分類上、博物館類似施設と呼ばれます。どれに該当するかによって、学芸員の設置や、年間開館日数などの条件が変わります。

このように博物館を分類するだけでも結構大変なのですが、実のところ、このシリーズではそういった分類に拘（こだわ）ることはあまり考えていません。どんな位置づけの施設かではなく、その展示などの内容が本シリーズの問題意識に合致している施設を取り上げていきたいということです。すなわち、次のような視点で施設の紹介をしていこうと考えています。

1　博物館･郷土資料館を改めて見直すことによって、地元の人たちにとってはそこが故郷の地理や歴史を学び郷土愛を深めるための場であるとの認識を深めてもらい、他地域の人たちにとっては、訪れた地の歴史や風土に触れることのできる学びの場であるとともに、観光の目的とするに値する場所でもあることを感じ取っていただきたいと考えています。

2　大きな都市にある博物館･郷土資料館については、規模も大きく、既に多くの方々が訪れていると思われますので、本シリーズでは、地方のどちらかというと地味な存在ではありますが特色のある施設を取り上げたいと思います。

3　現在、国が定める「北海道総合開発計画」の下で、全道的に「ほっかいどう学」の取り組みが進められています。このシリーズも、地元のことを知るために博物館・郷土資料館をもっと利用し、理解してもらおう、という狙いがあります。その意味で、本シリーズは、「ほっかいどう学」をもっと広めていくことにも役立てたいと考えています。

このシリーズで紹介する施設ですが、私たちも道内の全ての内容や状況を熟知しているわけではありません。各施設の皆様には、我が施設を取り上げて欲しいという自薦をお待ちしています。

本シリーズを、是非ご愛読ください。

連絡先：開発調査総合研究所
Mail：north@hkk.or.jp
Tel:011-709-5213

楽しみ方は1つじゃない
ニセコ町・有島記念館

有島記念館　学芸員　河野　紫杏

有島記念館外観

ニセコ町の文学館

札幌市から南西へ車で約２時間、「蝦夷富士」とも呼ばれる羊蹄山の麓に位置する町がニセコ町です。住民基本台帳人口は2026（令和８）年１月末現在で5,685人、そのうち約20％である1,223人を外国人住民が占めます（「北海道ニセコ町ホームページ　人口と世帯」より）。

ニセコ町の主要産業は農業と観光です。冬には山間部に降る良質なパウダースノーを求めて国内外から多くの観光客が訪れます。

今回紹介するのは、ニセコ町・有島記念館です。JRニセコ駅から車で約10分、羊蹄山を一望する眺めが良い場所に位置しています。「有島」とは明治・大正期に活躍した白樺派の小説家である有島武郎のことで、有島記念館は有島の作品や思想、実践などを伝える博物館です。

有島は1878（明治11）年、東京生まれ。学習院中等科を卒業後に札幌農学校（のちの北海道大学）へ進学、1908（明治41）年から札幌農学校の後身である東北帝国大学農科大学で教員を務めました。では、なぜニセコ町に有島武郎の記念館があるのでしょう。それは有島家がニセコ町に農場を所有していたことが始まりです。

有島家の農場

明治中期の北海道は、交通事情の悪さや冬の豪雪により開拓が遅れており、それを進めるため1897（明治30）年に「北海道国有未開地処分法」が施行されます。これは未開の国有地を無償貸付し、開墾に成功すればその土地を無償付与するというものでした。この時有島の父・武は現在当館が位置する場所を含む土地の貸下げを出願。そして、1908（明治41）年に名義人を有島武郎に改めたことで有島農場が誕生します。

しかし、有島はアメリカ留学でクロポトキンの『相互扶助論』に影響を受け、小作人の貧しい暮らしの上に成り立つ自らの恵まれた境遇に思い悩みます。そして、1922（大正11）年に小作人が農場の土地の所有と運営を共同で行うことを前提に無償解放を宣言しています。1924（大正13）年には小作人たちにより営農さ

れる「狩太共生農団」が設立しましたが、終戦後の占領軍による農地改革の対象となり、1949（昭和24）年に農団は解散、農地はそれぞれの私有地となりました。

有島記念館の始まり

農団の解散後、団員は有島の思想と実践を後世に伝えるため「有島謝恩会」を設立。旧農団事務所に有島や旧農場の資料を保管・展示して、初代の有島記念館となりました。この建物は火災により焼失してしまいますが、展示品のほとんどは無事に搬出されています。1963（昭和38）年７月には再建運動がおこり、謝恩会などからの募金もあって２階建ての有島記念会館が建設されます。その後、建物の老朽化や謝恩会による維持管理が困難となり、ニセコ町が有島武郎生誕100年を記念して1978（昭和53）年に有島記念館（現在の常設展示室部分）が建設され、それまで有島謝恩会が所有していた有島や旧農場の資料などが引き継がれて、保存・公開が行われています。

有島だけじゃない有島記念館

有島記念館では先述した有島に関わる資料以外の展示も行っています。その一つ、藤倉英幸の作品は年間を通してご覧いただけます。四季折々の北海道の風景画をはり絵で描く作家であり、当館では約１万点の作品を所蔵しています。1948（昭和23）年に現在の岩内町で生まれた藤倉は、高校卒業後に製菓会社などに勤務しながらイラストやグラフィックデザインなどを独学で習得し、1974（昭和49）年に「イラストアンドデザイン工房フジクラ」を設立しました。そして80年代より「切り絵」の作品を発表。80年代後半からは「はり絵」を用いて北海道の風景画を描きはじめ、自身のライフワークとしています。その作品は菓子や牛乳パックのパッケージにも用いられ、多くの人々に親しまれています。

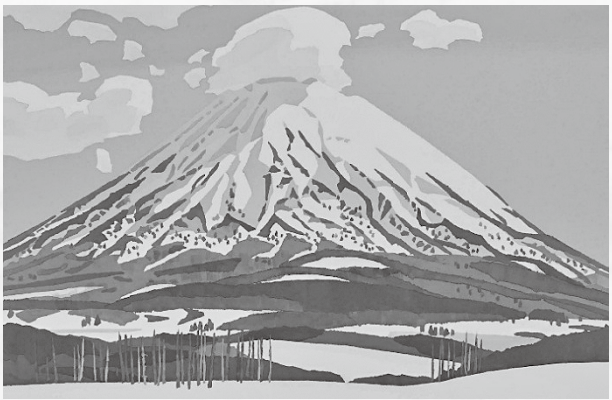
有島は、東北帝国大学農科大学美術同好会「黒百合会」の創設に関わったほか、雑誌「白樺」でロダンの彫刻を紹介するなど、北海道の美術史にも足跡を残しています。その美術に対する精神を継承するため、1989（平成元）年より毎年10月に中高生を対象とした「有島武郎青少年公募絵画展」を開催しています。

また、有島記念館ではJRニセコ駅隣接地のニセコ鉄道遺産群で、降雪期を除いて蒸気機関車「9643」と旧新得機関区転車台、夏季は引退したリゾート列車「ニセコエクスプレス」を公開しています。秋には「ニセコエクスプレス」の車内公開や転車台の回転ショーを行い、多くの町民や鉄道ファンが訪れる一大イベントとなっています。

ニセコの有島記念館へ

このように、有島記念館は小説家・有島武郎だけの博物館ではありません。文学に興味がなくても美術や鉄道の展示、外の景色などを楽しむことができる施設です。年間を通して町内で採れた野菜や牛乳を用いた食や豊かな自然を体験するアクティビティなど様々なコンテンツを楽しめるニセコ町ですが、その１つに有島記念館も選んでいただけると幸いです。

開館情報などについては有島記念館のホームページや公式SNSにて確認の上ご来館ください。



藤倉英幸《春を呼ぶ羊蹄》はり絵2012年制作

有島記念館ホームページ　X（旧Twitter）　Instagram

アリシマエナガ Arishima Enaga

アリシマエナガ館長も皆さんのご来館をお待ちしています

北海道における地域コミュニティの活性化に向けて
－地域課題の解決に向けた新たな共創の取り組み－

第９回

地域コミュニティと防災・減災
－北海道の災害経験と社会関係資本－

室蘭工業大学大学院工学研究科教授　有村 幹治

1　はじめに

人口減少と高齢化の進行による地域コミュニティの弱体化が全国的な課題となっている。町内会や自治会といった地縁組織の担い手不足や活動の形骸化は地域運営のさまざまな場面に影響を及ぼしているが、とりわけ防災・減災の分野では、その影響が顕著に表れる。災害は突発的に発生するが、被害の大きさや被災後の社会活動の回復は平時にどのような関係性が地域に蓄積されていたかによって大きく左右される。

北海道は、地震、津波、豪雪、暴風雪など、多様な災害リスクを抱えている。2010年以降の災害を振り返ってみると、2011年東日本大震災は勿論（もちろん）のこと、2016年北海道豪雨、2018年胆振東部地震及び全道ブラックアウトの発生など、記憶に新しい災害が多い。2025年７月30日にはカムチャツカ半島沖地震に伴う津波警報の発表により、自動車避難を要因とする渋滞が各地で発生した。同年12月８日には体感を伴う青森県東方沖地震（最大震度６強）が発生し、同様の自動車避難による渋滞が道内各地で再び発生した。

これら一連の災害は、北海道が特定の災害に限定されない複合的なリスク環境に置かれていることを示すと同時に、災害の発生形態や影響の及び方が多様であることを改めて浮き彫りにしている。突発的な揺れを伴う地震災害だけでなく、停電や交通遮断、遠地津波のように切迫感が共有されにくい事象に対しても、地域社会としてどのように対応するかが問われている。

2022年には北海道から太平洋沿岸部を対象とした日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震による被害想定が、また2025年には日本海沿岸の地震・津波被害想定が公表され、各自治体において防災計画やハザードマップの整備が進められている。しかし、実際の災害発生時に人々がどのように行動するかは、その時々の状況に応じて変化するため、発災前の平常時における個々人や世帯、また地域社会の「備え」が重要となる。

本稿では、北海道における災害対応の実態を踏まえ、防災・減災における地域コミュニティの役割を整理する。具体的には、町内会などの地縁的コミュニティに加え、家族や職場といった生活単位のコミュニティにも着目し、他者との信頼関係を基盤として相互に価値を創出する社会関係資本の観点から議論したい。

2　防災・減災における地域コミュニティの役割

まず、災害発生前・発災時・災害後のタイムラインに沿って、防災・減災の地域コミュニティが果たす基本的役割を整理する。

⑴　災害前：日常の延長線上にある備え

災害前の備えは、個々人や世帯における防災用品の準備や避難経路の確認、また企業・法人による事業継続計画（BCP：Business Continuity Plan）の策定といった個別の行動（自助）や、地域防災計画の策定など、行政が主導する備え（公助）だけで完結するものではない。地域のどこが危険なのか、誰が支援を必要としているのかといった情報は日常的な対話や顔を合わせる機会を通じて少しずつ地域社会の中で共有されていくものである。

災害前の備えの一つとして、町内会連合や学校を対象とした避難訓練がある。筆者は過去に胆振地域の自治体や学校の避難訓練参加者を対象に携帯GPSを配布し、アンケート調査と併用することでより詳しい避難行動の実態把握を試みた。結果を見ると、訓練参加者が

想定している避難所要時間よりも、実際の所要時間のほうが長い事例が、度々生じていた。「地形をよく知っている」、「土地勘がある」といった理由から「自分は大丈夫だ」と考える人ほど、結果的に避難が遅れるケースもありえる。個々人の防災意識の高さが、必ずしも安全な行動に直結しない点は、防災・減災を考えるうえで重要な示唆を与える。写真１は2017年に室蘭市桜蘭（おうらん）中学校にて実施された集団避難訓練の事例である。避難所の場所や避難所要時間、移動経路、集合場所などを、自分が属するコミュニティ内において事前に相互確認しておくことは、災害時における円滑な行動に繋（つな）がるだろう。

写真１ 2017年室蘭市桜蘭中学校全校避難訓練（筆者撮影）

⑵ 災害時：自助・共助の備えの発揮

災害発生直後、公的機関が直ちにすべての地域をカバーすることは難しい。初動対応の多くは、所謂（いわゆる）「津波てんでんこ」に代表される個々人の自助による避難行動が最優先されるが、同時に近隣住民による声掛けや安否確認、身近な人同士の助け合いによって支えられている。特に高齢者や一人暮らし世帯にとって、顔見知りの存在が避難行動を後押しするかどうかは、生死を分ける要因となり得る。

一方で、誰と一緒にいるか、どのような状況で警報を受け取ったかによって、避難判断は大きく左右される。防災・減災のための行動は個人の意思だけで完結するものだけではなく、自らが所属するコミュニティとの関係性の中においても決定される。

⑶ 災害後：復旧・復興を支える土台

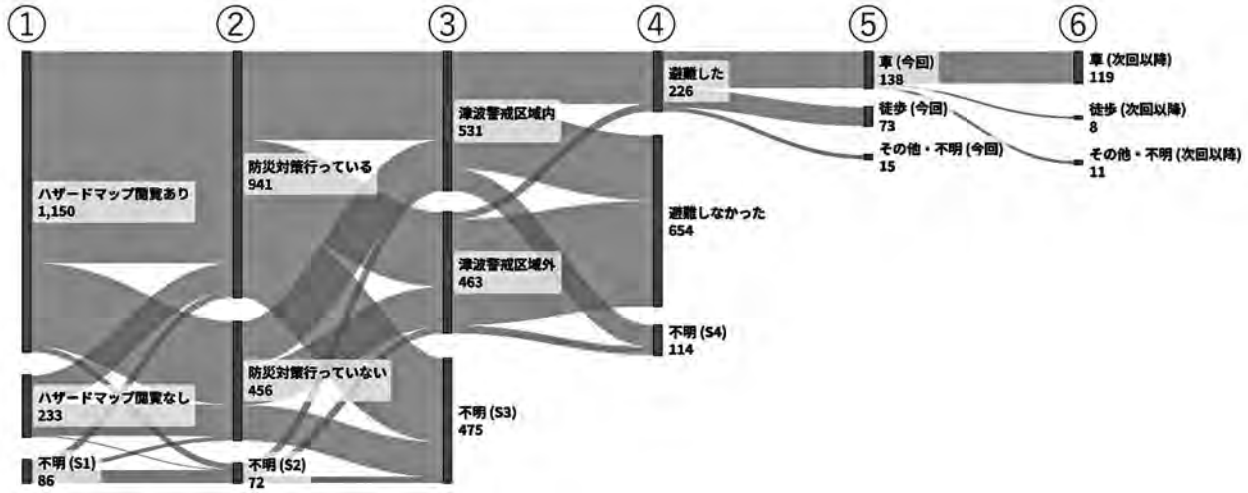
災害後の生活再建においても、地域コミュニティは重要な役割を果たす。物資や情報の融通、声掛けによる心理的支援など、「顔の見える関係」が被災者の孤立を防ぐ。復旧期における避難所での生活のベースになることは勿論、より長期的な復興期の過程においては、住民同士、そして行政との合意形成が不可欠であり、その基盤となるのは平時からの信頼関係となる。

筆者らの研究グループは、2018年胆振東部地震及び北海道ブラックアウト後の地域社会の動向について、新聞データベースを用いて分析した。その結果、災害後の多くの局面において、地域コミュニティが防災・減災上、重要な役割を果たしていた。例えば、室蘭市町内連合会は2012年の胆振地域暴風雪に伴う室蘭・登別市での大規模停電を教訓に、あらかじめ災害時の行動マニュアルを策定していた。また函館市自主防災組織においては、地場企業と町内会との間で自主電源の貸与などに関する災害時協定を締結していた。このような取組は、過去の災害対応を踏まえて対策を見直しつつ、将来の災害に備える共助の仕組みを地域コミュニティ内で構築してきた事例として位置付けられる。

3 カムチャツカ半島沖地震に見る集団避難行動

2025年７月30日に発生したカムチャツカ半島沖地震により北海道太平洋沿岸部に津波警報が発表された。それに伴い、苫小牧市や室蘭市、函館市など、多くの地域において自動車による避難渋滞が観測された。

本学は室蘭市と連携し、地震発生後の行動に関するアンケート調査を、室蘭市内5,000世帯を対象に実施した（有効回答数1,469部）。アンケートの代表的な質問内容は、「年齢・性別・居住地区等の属性情報」「当日９時40分の津波警報発令時の状況」「避難行動・避難後の状況」「日ごろの災害への備え」「自由記述」などで構成されている。なお、アンケート調査集計結果の詳細は、室蘭市ホームページ[1)]にて公開されている。



図－１　2025年カムチャツカ半島沖地震津波警報発表時の室蘭市民の備えと行動

（左より、設問①ハザードマップを閲覧したことがあるか？、設問②普段から防災対策を行っているか？、設問③居住地は津波警戒区域内か外か？、設問④津波警報発令時に避難したか？、設問⑤その時の交通手段は？、設問⑥次回避難するときの交通手段は？）

図－１[2] はアンケートの各設問の回答結果の関係を可視化したものである。左から右方向にかけて、各設問に対する次の設問の構成割合を線の太さで示している。津波警戒区域内の避難の有無に注目すると、津波警戒区域内であっても避難しない人が多かったことが分かる（設問③⇒④）。また「揺れを伴わない」津波警報発表時点の判断であっても、避難した人の約６割の人が自動車を選択している。その結果、市内の高台に向かう複数の道路で渋滞や路上待機する状況が観測された（写真２）。なお、同様の自動車避難による渋滞は北海道太平洋沿岸各地で観測されている。

写真２　高台で待機する避難車両（室蘭工大周辺）

北海道では、日常生活における移動の多くが自家用車に依存しており、その延長として、世帯単位や高齢者を含む避難行動においても自動車が選択されやすい傾向が見られる。しかし自動車による避難には明確な課題がある。それは住民全員が自動車で避難すれば、道路容量の制約から容易に渋滞が発生し、かえって避難の遅れによる危険性が高まることである。自動車避難の難しさは、地域社会全体でみると移動時間が大幅に増加し、結果的に大きな被害に繋がるジレンマにある。徒歩避難を原則とする考え方が防災計画で重視されてきた背景には、このような現実的な制約がある。

しかし北海道は都市部と地方部で人口密度は大きく異なる。地域によっては渋滞が起こる可能性が低く、また自動車でなければ高台まで移動することが困難な地勢の地域もある。人口密度が低く、十分な道路容量を確保できる地域であれば、原則徒歩のルールに加えて、自動車避難を検討する余地はある。重要なのは、自動車避難を一律に否定することではなく、地域の生活実態を踏まえた現実的な避難手段の組み合わせや避難ルールを各地域の実情に合わせて検討すること、また地域コミュニティにおいて事前に合意しておくことである。

4　社会関係資本と防災・減災対策

地域コミュニティを防災・減災の観点から捉える際、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の概念は重要な手掛かりとなる。社会関係資本とは、人々の間に形成される信頼関係や共有された規範、さらには人と人を結ぶネットワークといった社会的なつながりを指す概念である。これらの関係性が協調的な行動を促進することで、社会全体の効率性や生産性を高める点に特徴がある。

北海道の地域社会においても、防災・減災対策の実効性は、このような社会関係資本のあり方と密接に関係している。北海道の地方部は開拓の歴史や比較的新しい都市形成を背景として、本州と比較して伝統的な地縁・血縁に基づく結び付きは弱いといわれる。都市部においては転入・転出が多く、必ずしも長期間同一地域に居住する住民ばかりではないことも一因である。

北海道の地域コミュニティの特徴を一概に定義することは難しいものの、防災･減災の観点から重要なのは、地縁に基づく関係性に加えて、家族や職場といった生活単位に基づく人のつながりが相対的に強い点にあると考えられる。災害前の平常時においては、町内会を基盤とした自主防災組織などを通じて地域住民が相互扶助的に活動し、情報共有や見守り活動などが行われるとともに、状況に応じて組織や所属を越えた連携が形成される場合も少なくない。また、災害後はそれを契機として、それまで必ずしも強固ではなかった地域内の関係性が再結合し、新たな協力関係が構築され、災害の記憶と対策が蓄積される事例も多い。

一方で、発災直後の初動においては、人々は必ずしも「地域コミュニティの一員」として行動するのみではなく、「家族と一緒に避難する」「職場の判断に従う」といった形で行動する傾向が強い。カムチャツカ半島沖地震に伴う津波警報発表時の避難行動を見ても、避難の有無や避難手段の選択には、こうした家族や職場といった生活単位のつながりが大きく影響していたことが伺える。

災害対応における人々の行動は、単一の地域コミュニティのみに基づいて決定されるのではなく、複数の生活単位のコミュニティが重なり合う人的ネットワークが大きく影響を与えている。そのため、防災・減災対策を検討する際には、自治体や町内会といった地域単位のみを前提とするのではなく、家族、職場、学校など、生活単位に基づく複数のコミュニティが多層的に存在しているという現実を前提に対策を講じる必要がある。

5　おわりに

北海道における防災・減災対策の高度化には、地域コミュニティと生活単位のコミュニティの双方を適切に位置付け、それぞれの役割が相互に補完し合う仕組みを構築する視点が不可欠である。とりわけ、発災直後の避難行動や情報取得、移動手段の選択といった初動段階においては、家族構成や就労形態、滞在場所といった生活条件が大きく影響するため、地域コミュニティ単位のみを基礎とした対策には限界がある。

今後の防災・減災対策においては、町内会や自主防災組織を基盤とする地域コミュニティ単位の取組に加え、職場・学校・福祉施設など生活単位に着目した対策を組み合わせることが求められる。具体には、エリア全体での企業や学校単位での避難ルールの共有、災害時の移動需要を考慮した交通マネジメントの導入など、コミュニティ間の役割分担と連携を前提とした防災・減災対策の検討が重要となる。

参考文献

1）室蘭市：【令和７年カムチャツカ半島付近地震】津波警報発表時の行動アンケート調査について,2025年11月14日
(https://www.city.muroran.lg.jp/prevention/?content=10149)

2）豊原怜旺,三浦颯太,高尾勇喜也,有村幹治：2025 年カムチャツカ半島付近地震時の室蘭市民の避難行動に関する要因分析,令和７年度土木学会北海道支部年次研究発表会論文報告集,第82号,2026年

地方創生

北竜町総合戦略2025

北竜町まち未来戦略課

1　はじめに　北竜町の魅力

北竜町は、北海道のやや中央の北西部、札幌より北へ100㎞（車で２時間）、旭川より西へ60㎞（車で１時間）に位置しています。

空から見た北竜町

まちの魅力はたくさんありますが、代表的なものが３つあります。

１つ目は、「ひまわり」です。夏になると、一面ひまわりが咲き誇る「ひまわりの里」の面積は23ヘクタールで、東京ドーム５個分の広さがあります。本数は約200万本で、世界のひまわりが約18種類植えられています。毎年７月中旬から８月下旬に開催される「ひまわりまつり」には、道内だけでなく、首都圏などの都市部や日本各地から20万人以上の観光客が訪れ、また最近ではインバウンドも多く、夏の北海道の代表的な観光スポットとなっています。

ひまわりの里

２つ目は、「農業」です。北竜町の環境に配慮した米作りの歴史は長く、農薬規制が緩やかだった時代の昭和63年から、全町を挙げて、有機農業、減農薬、無防除の栽培に積極的に取り組んできました。特に、農産物の生産履歴に関する情報を、消費者へ正確に伝えることを第３者機関が認定するJAS規格制度を取得し、全国の消費者に北竜町の安全・安心な米を、誇りを持って届けています。こういった取組や姿勢が評価され、第46回日本農業賞（集団組織の部）の大賞を、本町のブランド米「ひまわりライス」を中心とした取組が評価され受賞しています。

また、米以外でも、黒千石大豆やひまわりメロン、ひまわりすいかなどの特産品が有名です。

ひまわりライス

そして、３つ目は、“お互いさま”の地域コミュニティが機能しており、人を大切にし、人と人とのつながりがある、いわば町全体が家族のような温かさがあることです。

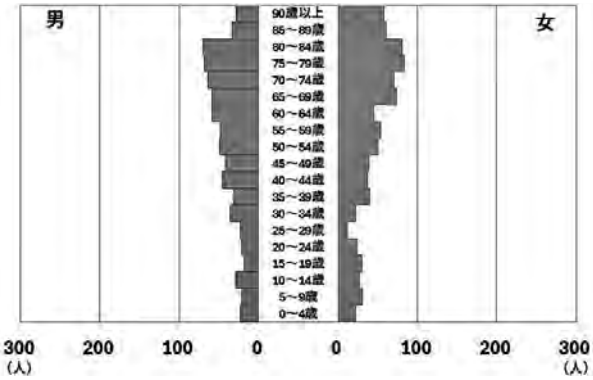
2　北竜町の人口の推移

北竜町の人口は、昭和35年の6,463人をピークに減少傾向に転じており、令和６年の人口は1,637人まで減少しています。その内訳として、生産年齢人口（15歳～64歳）は、ピーク時に比べて約80％減少しており、

一方で高齢化率は令和６年度45.8%となり、上昇傾向にあります。

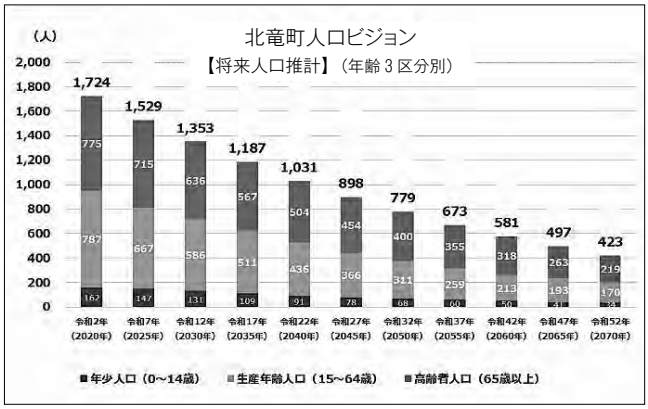
その結果、現在の北竜町の人口ピラミッドは、「ツボ型」となっており、地域のコミュニティの維持や地域活動、農業などの地域産業の担い手が確保できない状態となっています。

北竜町人口ピラミッド（令和６年）



また、国立社会保障・人口問題研究所（以下、「社人研」という。）の推計を基に北竜町の将来人口の推計を行うと、高齢者人口、生産年齢人口、年少人口（15歳未満）ともに、今後５年ごとに10%程度の減少が続いていくと推測され、このままでは、農家数や建設業、小売・飲食等の令和52年度の就業者数は、令和２年度比でそれぞれ１/５程度になると思われます。

こういった状況を踏まえ、「北竜町総合戦略2025」を策定することとなりました。



３　「北竜町総合戦略2025」について

【現状の課題を踏まえ】

現状の課題は大きく分けて、４つです。

１つ目は、生産年齢人口の減少や若い世代の転出（大学進学や町外への就職など）により、農家など地域の担い手が不足しているという「地域の担い手不足」の課題が一つあります。

２つ目は、町の主力産業の農業は、携わる人や、続けていく人の不足の課題に加え、付加価値の向上や稼げる品目の拡大など、今後の農業経営についての課題があり、生産額の大きい建設業は、深刻な人手不足と現在担っている公共的な役割や依存度を今後どうしていくかなど、「産業構造の偏り」を改善していかなければならないという課題があります。

３つ目は、「観光資源等に制約がある」という課題で、具体的には、「ひまわりまつり」の集客力は高いものの、その他の観光資源（独自のお土産、メニューなど）や、コンテンツ（アクティビティや体験など）が十分でなく、一年を通じての外部との接点が不足していることに加え、現行の「ひまわりまつり」や「観光センター」の若い世代からの評価や魅力が低下しつつあることです。

４つ目は、他地域との横のつながりや、課題の共有が十分でないこと、都市部や民間企業などと、win-winとなるような取組や持続可能なしくみがないなど、「地域間や民間との連携が不足」しているという課題があります。

これらの課題を改善したり克服していくために、総合戦略の基本方針を定めました。

【掲げた基本方針（目指す姿）】

基本方針は、『楽しい「ひまわり暮らし」を実現し、次世代に引き継がれる未来志向のまちづくり』です。

人口規模が小さくても、しごとや活躍できる場所と機会があり、地域経済が元気に循環し、“お互いさま”の地域コミュニティが機能している「人を大事にし、安心して楽しく働き、楽しく暮らせる」まちを未来につなげていく。特に先端的な学び、特色ある人づくりのしくみがあることで、子どもから高齢者まで、町民一人ひとりの可能性を最大限引き出すとともに、その選択肢を拡大していく。都市部の民間企業人材や、専門的なスキルや能力を持つ人材、大学生など若い人材など、多様な関係人口を増やすこと、相互につながりながら高め合うことで新しい流れをつくり出し、ひまわりのように明るさと希望と幸せが実感できるまちを目指す。その際には、町民や事業者、行政など関わる

すべての人が、自分の立場や役割にとらわれず、役場や各種団体内の縦割りのしくみを超え、フラットな立場で、横断的かつ柔軟に取組んでいく、という「コンセプト」を掲げています。

しごとや活躍できる場所と機会があり、町の経済が元気に循環し、お互いさまのコミュニティが機能している。子どもたちから高齢者まで、町民一人ひとり誰でもチャレンジでき、サポートを受けられることを通して、みんなで未来を創っていきます。

【町の約束:最重要業績評価指標（最重要KPI)】

『2030年度の関係人口を、1,600人にする』

これが、北竜町の最重要業績評価指標（最重要KPI）です。「ひまわり暮らし」を必ず未来につなげていくために、これを最も上位の業績評価指標に位置づけ、町で暮らす人、町で生まれ町の外で活躍する人、そして、これまで町を創ってきたすべての人たちと『約束』として掲げています。

ちなみに、北竜町が定義する「関係人口」とは、元々は町外で暮らしていたが、北竜町に関わる何らかの機会（例:「ひまわりまつり」など観光で来訪した、町が提供するアクティビティに参加した、町内の事業所などと仕事をした、農業研修などに参加した、地域交流や事業提案プログラムに参加したなど）があったことがきっかけとなり、町で活躍するようになった人、町外から定期的にまちづくりに関わっている人、まちの取組やプロジェクトに携わっている人、町の強力なファンとして、定期的にふるさと納税などにより、金銭的な応援をしている人の中で、町の人と顔見知りになった人たちと町の人たちが、顔と顔が見える関係を築いている状態と定義しています。

北竜町の人口は約1,600人と、決して多くはなく、まちづくりの主体（プレイヤー）は限られています。しかし、北竜町の人口と同じだけの「関係人口」の人たちと、総参加で取り組んでいくことで、生産年齢人口を構成する世代を中心とした、多様な世代の参画によるまちづくりの持続性が、確保されると考えています。

町民と関係人口の人たちが力を合わせて、素早く試行・実行し、変化に対応しながら改善を繰り返し、段階的に進化させていくという手法（アジャイル型）で進めていくことが必要であり、これを『関係人口のエコシステム』と名付けています。

これを循環させていくことの先には、「まちづくりのプレイヤーや担い手が増えている」「町民がやりたいことができるよう、スキルや知識が上がっている、できるしごとが増える、活躍の輪が広がっていく」という、未来の姿を描いています。

【基本目標１】安心して働き、暮らせる生活環境の創生

① 安心して働き、職場づくり、人づくりを起点にした社会の変革により、楽しく働き楽しく暮らせる場所として、「若者・女性にも選ばれるまち」をつくります。

考えられる施策や取組としては、コンパクトなまちづくりプランの策定、まち全体の景観・グランドデザイン、義務教育学校の開設、地域全体で子育てする気運と環境の醸成、保育環境の改善・充実、魅力的で特色ある学びの提供、子どもの放課後の居場所の充実などがあります。

② 年齢を問わず誰もが安心して暮らせるよう、地域のコミュニティ、日常生活に不可欠なサービスを維持します。

考えられる施策や取組としては、介護・福祉・医療連携エリアの環境整備、多世代が交流できる場やしくみの整備、老人福祉センターの環境整備、社会福祉協議会関連事業の充実、高齢者が活躍できるしくみづくり、新規就農や農業体験の積極的受入れ、新たな交通システムの構築・運用、スクールバスなど子どもたちの足の確保、テーマ型コミュニティの創出・活動支援などがあります。

関係人口ピラミッドと関係人口エコシステム

新たな地域公共交通「ひまわる」

③　災害からまちを守るため、事前防災、危機管理に取り組みます。

考えられる施策や取組としては、街路灯など防犯・防災環境等の整備、防災備蓄品の充実と新たな機器・機材の整備、救急体制の整備、高齢者等の日常生活の安全安心の確保（食事、清掃、ごみ出し、見守り等）公共インフラの適正な維持管理、などがあります。

【基本目標２】東京一極集中のリスクに対応した人や企業の地方分散への対応

①　東京など都市部からの地方への移住や企業移転、関係人口の増加など人の流れを創り、東京圏への過度な一極集中の弊害を是正します。

考えられる施策や取組としては、まちのブランド共有と、タウンプライドの醸成、戦略的なプロモーションの展開、都市部等の民間企業人材との新たな協働事業、大学生のキャリア育成と地域課題の解決を両立させるしくみの「キャリアデザインキャンプ」の実施、共創・イノベーションが生まれる取組の実施、「関係人口のプール」づくりと関係人口がまちづくりに参画するしくみの構築、特定地域づくり事業協同組合の活用、クリエイターなど専門人材とのコラボによる稼ぐ力の向上、イノベーションの創出などがあります。

「キャリアデザインキャンプ」

【基本目標３】付加価値創出型の新しいまちの経済の創生

①　農林業や観光産業を高付加価値化し、自然や文化・芸術など地域資源を最大限活用した高付加価値型の産業・事業を創出します。

考えられる施策や取組としては、北竜町特有の特産品開発・販売、地域資源の販売や高付加価値化、新しい体験や観光サービスの開発・提供、公共施設や公共基盤等のグランドデザインの一体化によるまちの空間や居場所の高付加価値化、サンフラワーパーク北竜温泉の環境改善、サービス価値や機能の向上、ひまわりの丘（仮称）やわくわく未来創造館（仮称）における新たな観光サービス・体験等の提供、中高生等が専門人材と学び・つくり・売る「ラボ＆ビジネス」のしくみづくりと価値創造モデルの展開などがあります。

②　内外から町への投融資を促進します。

考えられる施策や取組としては、新しいデジタル技術等を活かした外部資金の調達、地域活性化起業人制度の活用、ふるさと納税寄附額拡大のためのしくみづくりと内製化による域内経済循環の促進、子どもや若者など町内人材の高度化・専門化による人的資本の強化・拡大、起業や新たなビジネスに対する伴走支援体制づくり、町職員等の兼業・副業の促進・サポートによるまちづくり人材の確保、短時間ワークシェアリング＆社会福祉＆コミュニティづくりの拠点「社協しごとコンビニ2.0」の展開などがあります。

社協しごとコンビニ2.0

【基本目標４】デジタル・新技術の徹底活用

①　ブロックチェーン、ＤＸ・ＧＸの面的展開など、デジタル・新技術を活用した付加価値創出など、町の経済の活性化、オンライン診療、オンデマンド交通、ドローン配送や「情報格差ゼロ」など、デジタルライフラインや、サイバーセキュリティを含むデジタル基盤を構築し、生活環境の改善につなげます。

考えられる施策や取組としては、まちづくりデジ

タル人材の育成、高齢者スマホ利活用の促進、デジタル機器の導入と生活環境の改善、子どものＤＸ（学校・保育園等）、行政デジタル環境の整備とデジタル関連機器等の充実・強化、まちに関連するサイト・ＳＮＳの充実、共助を促すポイントシステムの導入、オンラインを活用した学びの場の提供、デジタル新技術の導入・利活用の支援、デジタルテクノロジー（３Ｄプリンター、プログラミング等）の拠点整備などがあります。

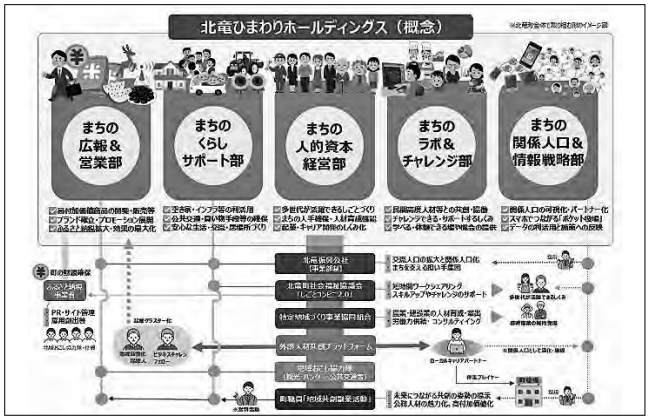
【横断的目標】「産官学金労言」の連携、機運の向上と、新しいまちづくりのしくみ

① 「北竜ひまわりホールディングス」による、総参加のまちづくりを進めていきます。

その際には、行政（役場）だけでなく、町民、民間企業、外部専門人材などと協働で取り組んでいくと同時に、子どもたちなど町民の「タウンプライド」の醸成を図っていきます。

② 地域で知恵を出し合い、地域自ら考え、行動を起こすための合意形成に努めていきます。

考えられる施策や取組としては、役場職員等による、部局横断の「アクションチーム」による、様々な事業の企画・実施、内発的関係人口づくりのシステム化・見える化、地域再生推進法人との連携・協働によるまちづくりエンジンの推進力の最大化などがあります。



北竜ひまわりホールディングス

③ 町と都市部の間で、また町の内外で人材をシェアする流れやしくみをつくる。

考えられる施策や取組としては、都市部などの民間人材の二地域居住やワーケーション等の受入れ、交流の促進、関係人口が活躍できるしごと・地域活動・ボランティア活動づくりと、マッチング＆サポートのしくみの構築、短時間ワークシェアリングシステムの構築、特定地域づくり事業協同組合制度を活用した、人材育成・スキルアップなど学びのしくみの構築と、町内事業者への転職促進、地域おこし協力隊を活用した人材確保・育成のしくみづくり＆ブランディング（ローカルキャリアパートナー、ビジネスチャレンジフェロー）などがあります。

④ 観光交流機能だけでなく、「ラボ」機能と、「関係人口のハブ（Ｈｕｂ）」機能を兼ね備えた「わくわく未来創造館（仮称）」を整備する計画を進めています。

具体的には、子どもを含む町民や関係人口のチャレンジを応援するするしくみ、起業を目指す人が民間高度人材等からのアドバイスや、支援が受けられる場、チャレンジキッチンなど、実験的に商売ができる場や機会の提供、デジタルテクノロジーを活用した、ビジネスにつながる学び、海外とのコラボレーション企画の実施、独自体験プログラムの提供などをイメージしています。

わくわく未来創造館（仮称）

4　おわりに

北竜町のブランドの約束は「ひまわり暮らし」です。

花が咲いている時は、ひまわりのように太陽の方を常に向いて栄養をたくわえ、花が終わるとたくさんの種を次世代につなげていく。そんなサイクルの中で、それぞれの人が人生を明るく豊かに楽しく過ごせる、北竜町ならではの新しい暮らしです。

1,600人の町民と、1,600人の関係人口が協働し、北竜町が目指す「ひまわり暮らし」を、必ず実現します。

ガストロノミックツーリズムin北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～

第８話
「日 高」

遊佐　順和（ゆさ　よりかず）

公立大学法人旭川市立大学 地域創造学部地域創造学科 教授

東京都出身。北海道大学大学院教育学専攻修了。大学卒業後、日本フイルコン株式会社、池脇会計事務所、AIR DO北海道国際航空株式会社、株式会社ホテルオークラ札幌などの勤務を経て、2010年より札幌国際大学に奉職し、2025年より現職に就く。本務の傍ら、内閣府地域活性化伝道師、北海道住宅供給公社理事、旭川市工芸センター運営委員会委員、旭川市国際交流委員会委員、一般財団法人北海道開発協会評議員、一般社団法人和食文化国民会議全国「和食」連絡会議「和食」地域特派員なども兼務する。

今回は日本有数の軽種馬産地の日高をご紹介します。日高管内では、例年ゴールデンウィークが近づき桜並木が見頃を迎えると新ひだか町（旧静内町、旧三石町）の二十間道路がつとに有名で、来訪者は雪解け後の土の香りと美しい桜並木に魅了され春の息吹を感じます。馬産地として名高い日高では、日高町から浦河町までの国道が「優駿浪漫街道」と称され、名馬を育てる多くの牧場を見ることができます。今年２月末、日高自動車道が新冠町まで延伸し、日高はより身近になりました。

日高は太平洋の大海原、見事な屏風のように聳え立つ日高山脈など、風光明媚で野性味溢れる土地柄。私にとっては、大学時代の部活の引退合宿で日高山脈の稜線を藪漕ぎして縦走した想い出の地でもあります。

これまでたびたび通う新ひだか町では、豊富な海山の幸が調理された料理を最上階のレストランでオーシャンビューを借景に食事ができるホテル、日高食財にこだわり創作料理を提供する飲食店も数多くあります。今回初めて訪問したカフェは、設えや器にこだわりと温かみが溢れ、店主は海のクリーン活動にも取り組まれ、まちをとても大切にされるphilosophyを感じました。

新ひだか町　二十間道路の桜並木と馬産地の広大な牧場
（写真提供：新ひだか町役場総務部企画課）

静内吉野町　静内エクリプスホテル「朝食、日高つぶめし」

静内山手町　温かい雰囲気のsyzygy cafe「看板、店内設え」

静内御幸町　居酒屋あま屋　昇三「店舗外観、昆布のアヒージョ」

豊かな素材を育む食財宝庫の新ひだか町

胆振地方からえりも岬にかけて海岸線沿いに伸びる国道沿いには、昆布漁の時季を迎えると「この先 昆布作業中 安全運転をお願いします。」という看板が随所に立てられ、昆布産地ならではの風物詩を感じます。

日高は道内の主要な昆布産地であるとともに、非常に優れた「食」が育まれる食財宝庫でもあります。「磯貝嘉市商店」では、豊かな海で育まれた天然昆布から出汁素材の昆布はもとより、昆布の特性を活かした調味料や昆布漁師の朝メシ「あらいそまる」と称した日高昆布豚まんが話題を集めています。「ファームホロ」は、幌村建設（株）が建設業の傍ら、2005（平成17）年に創業し、アスパラガス栽培を本格的に開始しました。現在、道内の人気飲食店はもとより、首都圏にあるミシュラン星付きレストランや天麩羅屋、国賓をもてなす某高級ホテルなどで永年にわたり重用されるほか、道内外の物産店でも販売されています。「まつもと牧場」では、日高昆布を配合したミネラル豊富な飼料により飼育された和牛から良質な牛肉が誕生し、首都圏の有名ホテルはじめ数多くの飲食店で幅広く支持を得ています。

三石越海町 磯貝嘉市商店
天日干しされた「三石昆布」

三石蓬栄　ファームホロ
春の恵み「アスパラガス」
（写真提供：ファームホロ）

三石川上　まつもと牧場
日高昆布を配合した飼料で良質な肉を生産「看板、牛舎の親子牛」

名馬産地と映画文化の情緒が薫る浦河町

浦河町には馬産地ならではの銘宿「うらかわ優駿ビレッジＡＥＲＵ」があります。吹き抜け天井の広々とした間取りの客室からは雄大な日高山脈を見つめ、ゆったり寛ぐことができます。館内には中央競馬で活躍した名馬達にちなんだ特別室や、馬好きな方には興味深いディスプレイなども数多く用意されています。場内では愛らしい馬と触れ合い、ホーストレッキングや引き馬体験もでき、馬や自然と一体になれる非日常の心安らぐひとときから、とても快適なステイが楽しめます。

浦河町西舎　うらかわ優駿ビレッジAERU「施設外観、特別室」

まちの中心街には、かつて多くの飲食店が軒を連ねた「浜町通り」の一角に1918（大正７）年創業で道内最古の映画館「大黒座」（館主 三上雅弘氏）があります。四代にわたり単館映画館を守り、日高の地から情緒豊かな文化を発信するとても貴重な存在です。取材時、久しぶりに上映中の作品を鑑賞しました。実話に基づき制作された作品は心の琴線に響き、多くの感動をもたらし、涙を拭いながらの作品鑑賞となりました。こうした芸術文化を鑑賞し、心や文化を育むことのできる「場」の大切さを改めて感じ、永年にわたり地元はじめ多くの方に愛され続けてきたこの映画館の灯をいつまでも絶やしてはならないと強く想いました。

浦河町大通２丁目　大黒座「店舗外観、上映作品ポスター」

豊かな食文化を堪能できるまちの味わい

映画館大黒座のすぐ近くには、永年にわたり町民からこよなく愛され続ける老舗（しにせ）洋食店があり、訪問した日も地元のお客様でとても賑（にぎ）わっていました。まちの中心街から少し足を伸ばして、かねてより気になっていた浦河のソウルフード「かつめし」も元祖の店舗でいただきました。その夜、飲食店街から離れた住宅街の一角で、東京の高級住宅街で静かに佇（たたず）むような上質な雰囲気が漂う寿司店を訪ね、粋な大将が地物ネタにこだわる握りや地魚の焼き物や和え物と出合えました。このほかにも、豊富な魚種が水揚げされる港町の浦河では、豊かな海山で育まれた食財を独自の調理方法で提供されている個性豊かな飲食店が数多くあります。

浦河町大通３丁目　愛され続ける老舗洋食店「サフランドール」

浦河町堺町東　絶品のソウルフード「かど天 かつめし」

浦河町堺町西　地魚にこだわる上質な食事処「鮨かわ」

まちを豊かに彩る鈴なりの夏イチゴ

浦河町や様似町は豊かな海幸に加え、「すずあかね」という夏秋採り品種の夏イチゴ生産地として知られています。このイチゴ生産は、2003（平成15）年に浦河町とひだか東農協が、バブル経済崩壊後に農業経営多角化の一環として目をつけスタートしました。冷涼な気候を生かした環境での栽培は、酸味が強く、果皮が硬めで日持ちが良いイチゴを育み、今や同品種の生産では日本一となりました。長距離輸送にも耐えられることから、主に加工用として生産、各地へ出荷されています。浦河町の若手生産者の一人、菅（すが）農園の菅正輝（まさてる）氏は自園の生産販売に加え、町内やとなりまち様似町の生産者等とも連携しながら、イチゴによる特色ある産地づくりにも精力的に取り組んでいます。

浦河町向別　うらかわ菅農園「苺畑、札幌　佐藤堂本店 苺パフェ※」
（※ 夏場、菅農園のイチゴがパフェやほかのメニューに登場します。）

えりも町の漁師が取り戻した豊かな海の恵み

日高南端の風極のまちえりも町では、かつて開拓者が燃料を求め木を切りまくり砂漠化してしまった浜を、漁師の皆さんが力を合わせ半世紀以上にわたり植林活動を続け、豊かな緑と昆布や海幸を取り戻した大切な浜があります。日高管内では昆布の水揚げが最も多いえりも町では、えりも漁協女性部による昆布や未利用魚の普及の取り組みや、昆布漁と短角牛飼育で半農半漁に取り組む生産者が牧場の一角に設けた短角牛を味わえる食事処「守人（まぶりっと）」もあります。2022（令和４）年秋、スペインバスク州ビルバオ市より北海道視察のため公費来日したシェフ等をお連れして、こうしたえりもの浜や生産者の皆さんを訪ね歩きました。シェフ等とともに

生産者の皆さんとの懇談や再生された浜の視察を通じて、豊かな食をいただけることの有難みや、海を育む森の大切さを改めて感じました。シェフ達は訪問した漁師宅で食事を振る舞ってくださったことに感謝の意を込め、えりもの海幸で見事なバスク料理を創作しました。僅かな時間で完成した料理はもとより、息の合うプロ集団のチームワークも非常に素晴らしいものでした。その調理シーンや、でき上がった料理に感激する漁師さん等からは、『いつも通りのうちの鮭や昆布だけど、こんな料理ができるんだっ！』と感極まる歓声をあげられました。その瞬間、コロナ禍の二年間にわたる受入れ準備の苦労は吹き飛び、人の縁と感動を紡ぐ「食」の大きなチカラを改めて感じました。

えりも町えりも岬 百人浜「案内板、えりも国有林の植林」

えりも町えりも岬
昆布漁師川﨑家「振る舞い膳とシェフ達のバスク料理」

えりも町東洋　高橋牧場 守人「店舗外観、短角牛の焼肉セット」

ミシュランのシェフ達を唸（うな）らせたスペシャリテ

ビルバオのシェフ等とともに日高を旅した際、平取町長を表敬訪問後、昭和レトロな雰囲気が漂う喫茶店に昼食で立ち寄りました。平取町特産のトマト、地元産の人参やブランド豚が日高昆布の出汁をベースに調理されたカレーライス「ジューシートマ豚カレー」を食べると、５人のシェフが一斉に『ＯＩＳＨＩＩ』と歓声をあげました。同店が永年作り続けるスパイスと日高昆布の出汁をベースとしたまろやかなカレーは、まさにプロシェフ達を唸らせるスペシャリテでした。

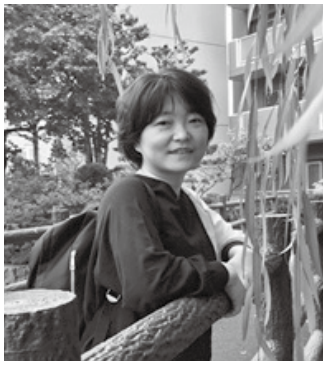
平取町本町　喫茶モンブラン「ジューシートマ豚カレー」

日高旅のエピローグを飾る心洗われる海カフェ

新冠町の国道沿いには太平洋の大海原を一望でき、日没まで営業するとても素敵なカフェがあります。店舗では、豊かな食や文化、奥深い自然美を堪能した後、旅路のエピローグで懐深き日高旅の余韻に浸れます。夕焼け限定セットをいただきながら、日没までゆっくりと流れる時間に静かな海を見つめ、心洗われるひとときを過ごせる素敵な空間です。食・文化・自然の懐深き日高をゆっくり堪能する旅に出てみませんか!

新冠町大狩部　椿サロンタ焼け店
「店舗外観、オーシャンビューを借景にいただく夕焼け限定セット」

北海道のキタキツネ　～「共生」の真の意味～



池田　貴子（いけだ　たかこ）

北海道大学 科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP）特任講師

1980年、神奈川生まれ、沖縄育ち。博士（獣医学）。修士課程まで帯広畜産大学、博士課程から北海道大学。学生時代より狩猟･有害鳥獣駆除統計解析、都市ギツネの営巣地選択、エキノコックス疫学を専門とし、現職就任以来、主に札幌市内の都市ギツネ問題のリスクコミュニケーションに取り組む。学生とともに、動画、絵本、SNSチャンネル、ボードゲームなどの教材開発に挑戦中。近年は、札幌市ヒグマ基本計画の改訂や北海道エキノコックス症対策協議会媒介動物対策専門部会にも関わる。

人と自然のあいだには、かつて目に見えない境目がありました。完全にこちら側でも、あちら側でもない場所です。里と山の交わるところ。昼と夜のあいだ。近くて遠い場所。キツネはそんな場所に生きる動物でした。その絶妙な距離が、キツネにまつわる数々の怪異の伝承を生んだのかもしれません。

けれども､いま起きているのは怪異ではありません。少しずつ変化してきた自然との距離の問題です。私たちは現実の街で、キツネと正面から向き合うことになりました。いま、彼らとの距離のとり方を、人である私たちが問われています。今回は、キツネと人間社会との軋轢（あつれき）について考えてみましょう。

餌付けが助長するキツネの「人馴（な）れ」

現在、野生動物への餌付け問題が全国各地で深刻化しています。観光地や都市近郊では、「かわいいから」「写真を撮りたいから」といった理由で餌が与えられ、それが人身事故や動物の行動変化につながる事例が報告されています。その象徴的な例のひとつが、知床国立公園です。知床は世界自然遺産にも登録されている地域ですが、観光客による餌やりが問題となり、動物の人馴れが進みました。その結果、ヒグマが人の近くまで現れる事例が相次ぎ、安全確保の観点から対策が強化されました。これを受けて、自然公園法が一部改正され、特定の地域での野生動物への餌やりが明確に禁止されました｡違反すれば罰則の対象にもなります。単なるマナーの問題ではなく、法的に規制される行為となったのです。新しく法律ができるほど、餌付けが社会的な問題として深刻になったということです。では、なぜ餌付けはそれほど問題なのでしょうか。

野生のキツネは本来、人間社会と適度な距離を保って暮らすものです。夜間や薄明薄暮に活動する、人を見れば逃げる、そうした行動は長い進化の中で彼らが身につけてきた安全装置のようなものです｡ところが、人から餌を与えられる経験を重ねると、その装置が少しずつゆるみます。人への恐れが小さくなり、街中を日中に堂々と歩くようになります。これが「人馴れ」

乗り捨てられた自転車に興味津々の仔（こ）ギツネ

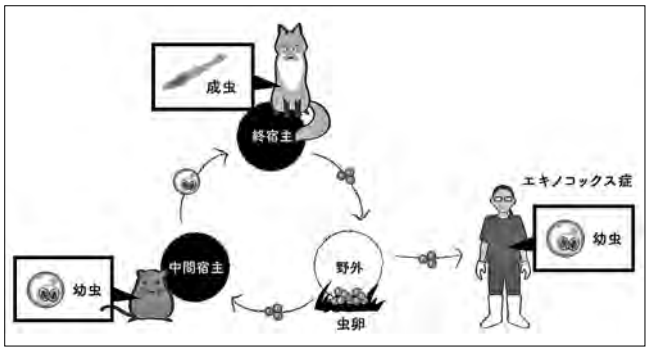
です。人馴れが進むと人との距離はさらに縮まり、キツネと人の生活圏がオーバーラップしていきます。

こうなってくると気になるのが「エキノコックス」の存在です。餌付けの弊害は他にもあるのですが、まずは道民にとっての静かな脅威、エキノコックスとの関わりについて考えてみます。

エキノコックスがキツネから人にうつるしくみ

エキノコックスは、北海道の自然の中に静かに生きる、とても小さな寄生虫です。学名では *Echinococcus multilocularis*、標準和名では「多包条虫」と呼ばれます。キツネの体の中で生活することはご存じの通りですが、それだけでは増えていくことはできません。キツネに加えて、野ネズミがいてはじめて、エキノコックスの一生は成り立ちます。その流れをたどってみましょう。まず、成虫はキツネの小腸にすみつき、体内でたくさんの卵（虫卵）をつくります。虫卵はキツネのフンとともに野外へ排出されます。その虫卵を野ネズミが知らずに口にすると、ネズミの肝臓でふ化し、幼虫になります。幼虫はそこで無性増殖し、肝臓の中に広がっていきます。この感染ネズミをキツネが捕食すると、幼虫はキツネの小腸へ移行し、腸管の壁に喰いついて成虫になります。そして再び卵をつくり、フンとともに野外へ排出されます。このように、「キツネの小腸」と「ネズミの肝臓」を行き来するサイクルを維持することで、エキノコックスは増えていきます。

興味深いのは、成長段階ごとに宿主が決まっていることです。卵から幼虫へと発育できるのはネズミの肝臓だけ、幼虫から成虫になって卵をつくれるのはキツネの小腸だけです。ネズミが卵を排出することはなく、キツネの肝臓に幼虫が寄生することもありません。したがって、キツネがエキノコックスのせいで健康を害することはありません。このように二つの宿主を必要とするしくみを「二宿主性」と呼びます。ネズミは「中間宿主」、キツネは「終宿主」です。



エキノコックスのライフサイクルと感染のながれ

では、人はどこに位置するのでしょうか。人が感染するのは、このサイクルに偶然入り込んでしまった場合です。感染キツネのフンに含まれる虫卵が、土や草、水などに紛れ、それを知らずに口にしてしまうことがあります。人の体内に入った虫卵は、ネズミと同じように肝臓で幼虫となり、そこで長い年月をかけて増殖します。やがて肝機能に障害をきたすようになった状態を、「エキノコックス症」といいます。

ただし、人の体内では幼虫は成虫になることができません。人はこの感染サイクルの中では「行き止まり」にあたります。人に寄生したエキノコックスが、そこから再び自然界へ広がることは（人がキツネに喰われる世界線でもない限り）ありません。エキノコックスにとって、人への感染は生存戦略としては失敗なのです。

日常でできるエキノコックス感染予防

少しややこしい話になりましたが、私たちが感染予防のためにやるべきことといえば、とても単純です。人にとっての病原体である虫卵を、うっかり摂取しなければ良いのです。虫卵は0.03mm程と肉眼では見えないサイズですので、目視によって避けることはできません。したがって、「虫卵が紛れているかもしれない物に触れない」というのが私たちにできる予防策となります。「山菜はよく洗って食べる」「湧き水を生で飲まない」と言われるのはそういうわけです。ちなみに「キツネに触れない」もよくききますが、実際には野生のキツネはそう簡単に触らせてはくれません。それよりも、虫卵が紛れているかもしれない「キツネのフンに触れない」ほうが大事です。かかると怖い病気ではありますが、注意すれば十分に防げる病気でもあるのです。また、必要であれば血液検査を受けること

もできます。早期に発見すれば大事に至らずに済みますので、ご心配な方はお住まいの自治体のウェブサイトを検索してみてください。たとえば、札幌市民の場合は無料で受けることができます。

さて、もしあなたがイヌを飼っている場合は、注意点がもう一つ増えます。知らない間にイヌが野ネズミを食べないようにしなくてはなりません。イヌも、キツネと同じ終宿主になり得る動物だからです。イヌがエキノコックスに感染すると、やはりフンと一緒に虫卵を排出します。フンを始末するのは飼い主ですので、あなた自身の感染リスクが高くなってしまうわけです。もし、お宅のポチが野ネズミを食べたかも！とご心配な場合は、かかりつけの獣医さんに診てもらってください。必要であれば駆虫薬を処方してくれます。キツネと同じくポチの健康に害はないので、そこはご心配なく。

もっと攻めたエキノコックス対策もある

駆虫薬の話が出ましたが、それを野生のキツネに食べさせてエキノコックスを駆除する「駆虫薬入りベイト散布法」と呼ばれる手法が、実は確立しています。月に一度、駆虫薬を混ぜ込んだ小さな餌（ベイト）を野外に一定間隔で散布し、キツネに食べてもらう方法です。キツネの小腸にいる成虫を駆除することで、虫卵がフンとともに排出されないようにし、環境中の虫卵の数を減らしていく作戦です。この時代に割とアナログ！と思われたかもしれませんが、今のところ、これが最もコスパの良い方法とされています。キツネごと駆除するのではなく、キツネの体内にいる寄生虫だけを排除する点が特徴です。

かつては、エキノコックス対策としてキツネ駆除が行われた時代もありました。しかし、なわばりが空になれば他所から別の感染キツネがやってくるだけです。それよりは、駆虫薬入りベイトを食べてエキノコックスフリーになったキツネになわばりを守ってもらった方が、そこに住む人間にとって好都合というわけです。ベイトで結界を張るイメージですね。ベイト散布法は、エキノコックスという種の根絶を目指すのではなく、「人間の生活圏の特定の地域だけは守る」ための手段といえます。

ベイトを食べるキツネ

北海道では、一部の自治体や研究機関が協力して、特定の地域でベイト散布を継続的に実施してきました。その結果、散布を続けている地域ではキツネの感染率が低下することが確認されています。ただし、散布をやめれば感染率が元に戻っていきます。ある一定の面積で半永久的に取り組まなければ、効果を維持することはできません。また、前編でお話ししたように、秋の分散期にはどうしても他所からキツネがやってきますので、ベイト散布を継続しているエリアであっても一時的に感染率が上がってしまう場合があります。そんなときに運悪く感染してしまわないように、結局は、私たち一人ひとりが用心するのが大原則です。まだ道内全域でベイト散布が実施されているわけでもありませんので、前の項で書いた「虫卵が紛れているかもしれない物に触れない」を徹底しましょう。

餌付けの弊害は想像よりずっと大きい

札幌市内のある公園では、数年前から特定の場所に餌が置かれ始め、それ以来キツネがその場所に日参するようになりました。自動撮影カメラでの観察で、餌付け人が去るとすぐにキツネが食べにくる様子が何度も記録されています。決まった時間に決まった場所に毎晩置かれる餌を、近くで待ち構えているのです。こ

餌を期待してじりじりと人に近づく仔ギツネ

餌付け場所で鉢合わせしたキツネとアライグマの攻防

の状態が何年も続き、今年の春に生まれた仔ギツネはすっかり人馴れしていました。親ギツネから「人間は食べ物をくれる存在」と英才教育を受けたのでしょう。園路を歩く人に恐る恐る近づき、餌をねだる姿が見られました。夏頃にはベンチで休む人の財布を盗み去るという事件も起こし、どうやら順調に人馴れを加速させているようです。

人馴れによりエキノコックスの感染確率が上がる可能性についてはすでにお話ししましたが、餌付けの弊害はそれだけではありません。特定の場所に食べ物が置かれるということは、キツネ以外の動物も集まるということです。この餌付けポイントでは、キツネがひと通り食べて去った数時間後、朝になるとカラスが群がってきます。これだけ多くのカラスが集まると、近隣への糞害も起きるでしょう。さらにこの場所では、特定外来生物であるアライグマまで来るようになってしまいました。さすがにキツネも自分の取り分となわばりを守るべく追い払うのですが、厄介なことに、ほどなくして樹のこちら側とあちら側で、キツネとアライグマが一緒に餌を食べるようになってしまいました。野生動物はおそらく感情でケンカをしません。争わなくても十分な餌が手に入るとなれば、大きな労力をかけて侵入者を排除する必要もないのかもしれません。

このように、キツネのために置いていった餌が他の動物を誘引することを、「意図しない餌付け」といいます。今お話ししたのは、わざわざ餌を意図的に置いていった例ですが、ゴミの不始末も、この意図しない餌付けを引き起こす大きな要因となります。前編でお話しした、庭のニワトリ小屋を襲われたお宅の近くの公園の話を覚えているでしょうか。人間が始末し損なったゴミにキツネが誘引された可能性がある、という事例です。ゴミを放置した人はキツネに餌を与えたつもりではないでしょう。こうして、意外なところで餌付けされてしまう危険性があるのです。

「共生」の真の意味

「あれしちゃだめ、これはいかん」と、説教くさい話になってしまったかもしれません。ですが、キツネをこれ以上人馴れさせないために、そして私たち自身がエキノコックスに感染しないためにできることは、実はとても単純です。野生動物との境界線をあいまいにしないこと。お互いの生活圏を尊重し、必要以上に近づきすぎないことです。

生態学では、こうした関係を「共生」と呼びます。「共に生きる」と書くので、仲良くすることのように思われがちですが、そうではありません。互いの場所を守り、すみわけること。ときには、一生出会わないことも、共生のひとつのかたちです。都市ギツネの場合はすでに人と生活圏が重なって久しいわけですが、必要以上に近づきすぎない、近づけすぎないことで保たれるほんの少しの距離がキツネの野生を守り、私たちの安心も守ってくれます。姿を見たときに、ただ静かに通り過ぎること。それもまた、共に生きるという選択なのです。

野菜を愛して30年

沼田町産直グループ　愛菜ママ
代　表　　植木　千鶴さん（うえき ちづる）
前代表　　堀　　直美さん（ほり なおみ）
会　計　　中村富美子さん（なかむら ふみこ）

農山漁村における地域の活性化や、個性的で魅力ある地域づくりの優れた活動を紹介するシリーズ。

今回は「わが村は美しく－北海道」運動第11回コンクールで奨励賞を受賞した「沼田町産直グループ　愛菜ママ」の皆さまにお話を伺いました。

≪雪に愛された沼田町の農業≫

空知管内の最北端に位置する沼田町は、雪国北海道を代表する豪雪地帯です。その沼田町の農業は、他とはちょっと違う独自の特徴があります。

最大1,500トンの雪を貯蔵し、雪の冷気を活用した貯蔵施設で農作物の栽培や米の保存をする手法で、キャベツやジャガイモなどはより甘くなり、しいたけも最適な温度で栽培できます。

なかでも米を籾（もみ）のまま貯蔵し出荷する際に籾摺（すり）りをする「雪中米」は沼田町のブランド米として流通しています。

≪30年を迎えて≫

農家に嫁いだ女性たちが、仲間づくりで立ち上げたこの団体は現在７名で活動しています。

低農薬野菜を全国に宅配販売して、メンバーが書いた手書き通信「愛菜ごよみ」を同封し、農家の暮らしや野菜を使ったレシピなど、食の安心・安全と農業の楽しさ・やりがいを発信してきました。

当初は野菜のセット売りなどは珍しく、好評でしたが、インターネットや移動販売などの普及などにより、今年30周年を迎えたタイミングで、野菜と併用して販売していた「みそ」ひとすじに専念することを決めました。「愛菜みそ」は沼田町産の特別栽培米の麹（こうじ）や大豆を使い、雪の冷気を利用した「雪室」で熟成されたいちおしの商品で、ふるさと納税の返礼品にもなっています。

ちなみに「雪室」は沼田町民なら誰でも無料で利用でき、町民のなくてはならない自然の冷蔵庫です。

≪「無理をしない」をモットーに≫

30周年を迎えた今年は、「みそづくり体験」を企画しています。同じ境遇の農家に嫁いだ女性たちが、お姑（しゅうとめ）さんから受け継いできた「熟練のみそ」をまた次の世代につないでいく。もちろん大好評の手書き通信「愛菜ごよみ」も忘れません。

“無理をせず、楽しみながら、できることを”

「愛菜ママ」が30年、ほとんどメンバーも変わらず活動を続けてきた秘訣がそこにありました。

当協会ホームページ、「わが村は美しく－北海道」運動第１～９回受賞団体の活動概要をまとめた冊子『生産空間の活性化に資する地域事例集』をご覧ください。

地域おこし協力隊　第55回

ゆっくり、じっくり、マンゴーと歩く ～鹿追町で見つけた私の新しい日々～

金澤　里奈（かなざわ　りな）

北海道札幌市出身。アパレル、動物看護士、バーテンダー、テレフォンアポインターなどに従事。2023年４月から鹿追町地域おこし協力隊に着任し、マンゴー栽培に取り組んでいる。

【念願のマンゴー栽培への挑戦】

私は今、鹿追町の地域おこし協力隊として、町内で進められているマンゴー栽培のお手伝いをしています。北海道でマンゴー、と聞くと「えっ？」と驚かれる方が多いのですが、私自身も最初は同じ気持ちでした。もともと私の中には「いつかマンゴーを育ててみたい」という強い思いがありました。そんな折、ちょうどこの町で新しい担い手を必要としているタイミングに出会い、不思議なご縁に導かれるようにして、大切なバトンを受け継ぐことになったのです。今日は、そんな私の鹿追町での暮らしと、協力隊としての日々についてお話ししたいと思います。

私が鹿追町へやってきた一番の理由は、シンプルに「マンゴーを作りたい」という強い思いがあったからでした。前職で都市部の忙しさに身を置いていたころ、ふと自分の将来を見つめ直し、本当に挑戦したいことは何だろうと考えた時、心に浮かんだのがマンゴー栽培でした。そんな時に出会ったのが、この鹿追町のプロジェクトです。北海道でマンゴーを育てるという、一見すると不可能にも思える大きな挑戦。そして、新しい担い手を必要としていたタイミング。地域おこし協力隊という形は、私にとってこの夢を現実にするための、最高のご縁でした。

【この町のマンゴー作りに惹（ひ）かれて】

鹿追町で挑戦しようと決めた大きな理由は、この町が取り組んでいる「エコエネルギーを利用したマンゴー栽培」というプロジェクトそのものに、強く惹かれたからです。初めてこの地を訪れ、どこまでも続く広い空と真っ直ぐな道を目にした時、ここでならマンゴー作りに真っ向から打ち込めると確信しました。町の方々も、マンゴーへの情熱を持つ私を温かく迎え入れ、「一緒に盛り上げていこう」と背中を押してくださいました。

１本１本枝を吊（つ）って整える「誘引作業」

【ハウスで過ごす、新しい毎日】

着任してからは、ハウスでの作業が中心の毎日です。マンゴーは南国の果物なので、温度や湿度の管理がとても大切です。鹿追町の冬はとても寒いので、ハウスの中はまるで別世界のように暖かく、時々「ここは本当に北海道かな」と思うこともあります。最初のころは、葉っぱの色の変化に気づけなかったり、水の量を間違えてしまったり、失敗ばかりでした。でも、町の担当の方や農家さんが丁寧に教えてくださり、少しずつマンゴーの様子が分かるようになってきました。

マンゴーの樹はとても繊細で、ちょっとした変化にも敏感です。猛暑の影響で、花がなかなか咲かなかったり、心配になることも多いのですが、毎日見ていると、少しずつ成長しているのが分かります。つぼみがふくらんできた時や、実が大きくなってきた時、小さなことでも嬉(うれ)しくて、つい誰かに報告したくなります。そんな瞬間が、私にとってのやりがいです。

【町の人たちの支えと、栽培の難しさ】

鹿追町での暮らしは、自然と人の温かさに支えられています。ご近所の方に「マンゴーどう？」と声をかけてもらえたり、町の人たちとの距離が近いことが嬉しく感じます。学生さんたちにマンゴーの話をした時には、「北海道でもマンゴーできるの？」と目を輝かせて聞いてくれて、その反応がとても励みになりました。

もちろん、困ることもあります。北海道の冬は想像以上に厳しく、外は吹雪でもハウスの中は暖かく保たなければならないので、設備の管理は大変です。また、マンゴー栽培の前例が少ないため、参考にできる情報が限られており、試行錯誤の連続です。でも、その分うまくいった時の喜びは大きく、初めて実がついた時は、思わず写真を撮って何度も見返してしまいました。

ハウスに咲くマンゴーの花

【鹿追マンゴーを、もっと多くの人へ】

これからの目標は、鹿追町のマンゴーをもっと多くの人に知ってもらうことです。まだ生産量は少ないですが、丁寧に育てたマンゴーを味わっていただき、「北海道でもこんなにおいしいマンゴーができるんだ」と感じてもらえたら嬉しいです。また、マンゴーを使ったスイーツや加工品づくりにも挑戦してみたいと思っています。観光と組み合わせた体験イベントなど、町の魅力を広げる取り組みもできたらいいなと考えています。

【マンゴーと一緒に成長していきたい】

鹿追町での生活は、私にとってとても心地よいものです。朝の空気は澄んでいて、季節ごとに景色が変わり、自然の中で深呼吸するだけで気持ちが落ち着きます。協力隊としての活動は、私に新しい視点や学びを与えてくれました。これからも、マンゴーと一緒にゆっくり成長しながら、鹿追町の一員として地域に貢献していきたいと思っています。

一つひとつ、大切に。収穫まであと少し！

十勝の太陽をたっぷり浴びた鹿追のマンゴー

すずきもものほっかいどうスケッチ

第54回

美味しいお米と豊かな自然、そして素敵な人たちが集う町

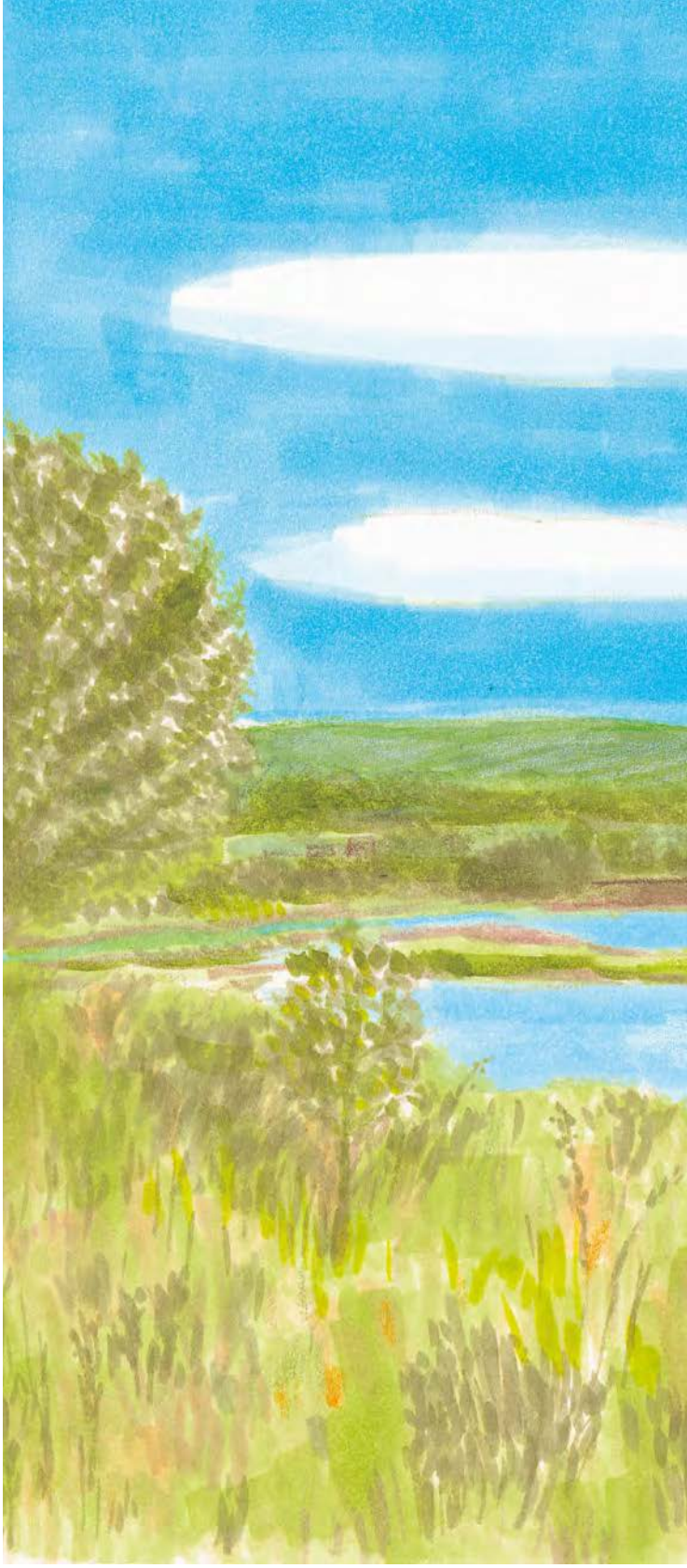
約20年前のこと。真狩の道の駅でゆり根丼を食べたら、お米がすごく美味しくて「どこのお米ですか？」と調理員さんに聞いたら「蘭越のお米です」と教えていただいた。それ以来、蘭越と聞くとお米が美味しいところと記憶している。

そんな蘭越のお米のような出会いがあった。蘭越在住の栄養士の高橋千恵さんは、食いしん坊な私の本を読んでくださり、いつのころからか個展に来てくださって、ゆっくり親しくなった。たぶん10年は超えている。蘭越に伺った時は、以前著書で取材させていただいたワイナリーや工房の方々が千恵さんにつながっていて、再会、再訪をさせてもらった。点と点が線になったような嬉しさがあって、蘭越はお米はもちろん、海や山の美味しい食べものがあったり、美しい風景に囲まれているけど、何より人々が素敵だなと思った。

蘭越駅の美化活動やフリーマーケットなどさまざまな地域活動をしてきた千恵さんは、一昨年これからは地域のためにと、スーパーマーケットだった場所を時間をかけて地域の人たちとリノベーションを行い、昨年「旧金谷商店－つくり場かずかず」をオープンした。作って食べるこども食堂をはじめ、大人の調理実習や健康講座ほか、さまざまな活動を行う地域コミュニティースペースとして活動をしている。

千恵さんを中心として、さまざまな人が集う「つくり場かずかず」は、蘭越のたくさんのつながりが生まれる、美味しくて楽しい場になりそうな予感がするのである。

＊連載タイトルを変更しました。相変わらず食いしん坊ですが、これからもいろいろな角度で北海道を見つめていきます。



すずき　もも

イラストレーター・絵本作家／元スローフードさっぽろ事務局長

東京生まれ、北海道夕張育ち。広告や雑誌、カレンダーなどのイラストを描くほか、イラストで綴る町案内の本や絵本などを執筆。ほか、「スローフードさっぽろ」を2016年に立ち上げ、食を中心に環境や暮らしの大事に取り組んでいる。著書に絵本「はるとなつ はたけのごちそうなーんだ？」（アリス館）「おいしい大地、北海道」（イースト・プレス）がある。近著に絵本「はたけのごちそうなーんだ？くだもの」（アリス館）がある。モットーは４つのS。「Simple，Slow，Small，Smile：ささやかに、ゆっくり、ほどほどに、にこにこと」。

地域の営みを「体験」としてひらく
ー広尾町・ピロロツーリズム推進協議会の活動と、旅宿「あわい」ー

ピロロツーリズム推進協議会

【はじめに】

北海道十勝地方の南東部に位置する広尾町は、太平洋に面し、漁業・酪農・林業など多様な一次産業が営まれてきた町です。昆布をはじめとする海の恵み、広大な牧草地で育まれる酪農、山と川に支えられた自然環境は、町の暮らしと切り離せない存在です。

一方で、こうした地域資源の価値や、そこに関わる人々の営みは、必ずしも十分に伝わってきたとは言えません。

ピロロツーリズム推進協議会（以下、「ピロロ」）は、こうした課題意識を共有する町内の漁業者、酪農家、狩猟家など、一次産業に実働で関わるメンバーを中心に立ち上がりました。私たちは、広尾町の日常に根ざした営みを、来訪者が実際に体験できる形で伝えていくことを目的に活動しています。

ピロロツーリズム推進協議会代表の菊地亜希さん

【ピロロの立ち位置】

ピロロは、行政機関でも、単一の事業者でもありません。また、観光商品を大量に生み出す組織でもありません。私たちの役割は、町の産業や文化、そして人と人との関係性をつなぎ、外に向けてわかりやすい形に“編集”することにあります。

生産者の現場に日常的に関わりながら、そこにある技術や知恵、時間の積み重ねを、体験や商品、対話の場として再構成する。その過程を通じて、つくる側にも、訪れる側にも無理のない関係性を育てることを大切にしてきました。

【具体的な取り組み】

ピロロでは、広尾町の一次産業を軸に、体験型観光や商品開発などの取り組みを行ってきました。

昆布漁の現場に立ち会い、海と向き合う時間を共有する体験企画。狩猟や食肉加工を通じて、命をいただくプロセスを伝えるプログラム。規格外や未利用となりがちな資源を活かした商品開発など、内容は多岐にわたります。

昆布浜と呼ばれる昆布干場で昆布干し体験。夏が全盛期を迎える

これらに共通しているのは、「地域資源を消費物として扱わない」という姿勢です。生産者の手間や知恵が正当に評価されること、使う人が背景を理解した上で選べること、そして地域に利益や関係性が残ること。この三点を重視しながら、活動を積み重ねてきました。

近年では、学生や企業、研究機関など、さまざまな立場の人々が広尾町を訪れるようになり、町の外との接点も少しずつ広がっています。

狩猟、昆布漁、酪農といった広尾町の産業に触れあってもらう企業研修やツアーを開催

ピロロで商品開発を行った、昆布を手軽に食べるおやつ「噛(か)む噛む昆布」

【活動を通して見えてきた課題】

一方で、活動を続ける中で、ひとつの大きな課題が明らかになってきました。それは、「町と密接に関わりながら滞在できる場所が存在しない」という点です。

視察や体験で広尾町を訪れた人々の多くが、宿泊は町外で行い、日帰りで帰ってしまう。結果として、生産者の日常や暮らしのリズム、現場の空気感に深く触れる機会が限られてしまっていました。

広尾町は現在、「訪れてもらう」段階から、人を迎え入れ、関係性を育てる段階へと移行しつつあります。そのためには、町の産業の中心にいる生産者と来訪者をつなぎ、受け止める拠点の存在が不可欠だと考えるようになりました。

【旅宿「あわい」という実装】

こうした課題意識から、現在ピロロでは、人と文化と産業の「あわい」として機能する旅宿「旅宿あわい」の開設準備を進めています。

「旅宿あわい」の食堂スペース

旅宿あわいは、単なる宿泊施設ではありません。ピロロのこれまでの活動を通じて蓄積されてきた関係性や知見を活かし、町と来訪者を結ぶ“間（あわい）”となることを目指しています。

滞在を通じて生産者と対話し、実際の現場を体験することで、広尾町の自然や産業を点ではなく、つながりとして感じてもらう。その体験が、訪れた人の人生の中にひとつの記憶として残ることを大切にしています。

【今後の展望】

ピロロは今後、旅宿あわいを活動拠点のひとつとして位置づけながら、商品開発、体験型観光、人材交流を有機的につなぐ取り組みを進めていきます。

小さな実装を積み重ねることで、地域に無理のない形で人の流れと関係人口を育てること。それが結果として、広尾町の未来を支える力になると考えています。私たちの実践が、同じような課題を抱える地域にとって、ひとつの参考事例となることを願い、これからも活動を続けていきます。

広尾町の公式移住パンフレット『move to PIRUY』
https://www.town.hiroo.lg.jp/output/contents/file/release/154/22119/movetoPIRUY.pdf

Piroro Kikaku

ピロロツーリズム推進協議会
https://www.instagram.com/piroro.tokachi.hirootown/

寄稿

北海道の観光活性化に向けて

ー開拓ヒストリーの絆を生かした姉妹都市交流の拡大ー

小長井　宣生（こながい　のぶお）
八千代エンジニヤリング㈱北海道営業所技師長

元北海道開発局留萌開発建設部長を経て現職。
平成５年２月５日技術士建設部門の資格を取得。
令和５年５月12日に春の叙勲で瑞宝小綬章を受章。

1　提言の背景

北海道開拓の歴史（以下本文中では開拓ヒストリーと記述）を観光振興に生かすべきという考えは、もともと平成28（2019）年に行われた北海道150年道民検討会議の意見募集に、筆者が応募したものをベースとしています。

北海道観光入込客数の推移*1を見ると、コロナ禍の2020～2021年の２か年は外国人客ゼロであったが、道外客は200万人以上訪れており、2023年度の全体4,777万人の内、道外客は505万人で外国人客234万人の２倍以上、全体の約10％強でこの割合は過去10年間ほぼ変わっていません。外国人客が、国のインバウンド拡大政策のもと年々増加しているのに対して、道外客数は伸びておらず、北海道の食と観光地が全国でも人気が高いことを考え合わせると、この道外客をターゲットとした誘致策の強化こそが、今北海道観光に求められると考えます。

開拓ヒストリーの絆（きずな）を生かした姉妹都市交流の拡大は、このような道外客誘致策の一つであり、また、従来から道民の中にあった、“開拓”に対するネガティブなイメージを払拭し、これを、次世代に引き継ぐ新たな北海道資産として再生させるものです。

2　開拓ヒストリーの絆と姉妹都市交流の現状

明治２年に函館に北海道開拓使が置かれて以来、明治、大正、昭和にかけて青森県から沖縄県までの全都府県から、300万人以上の人々が北海道に開拓のため移住し、今日の発展の基礎を築いてまいりました。

全国から入植した道内の市町村数は、表１に示すように122に上り全道179の約７割を占めています。移住者の出身県を見ると、１位が青森県で、以下10位までが地理的に近い東北６県と北陸４県で占められており、北海道との絆が深いことがわかります*2。

道内市町村について、本州との姉妹都市交流の現状を見ると、全体で158件あり、このうち開拓にかかわるものは表２に示すように48件、36市町村と交流件数

の３割、入植市町村数の３割とまだ少ない状況にあります。また、「開拓姉妹都市」と明確に開拓に関連するものは、帯広市と静岡県松崎町の１事例のみです。

これを見ると、まだまだ開拓を縁とした交流拡大の余地が大きいと言えます。

表１　全国から開拓移住した道内市町村

石狩	札幌市、江別市、北広島市、石狩市、恵庭市、千歳市、当別町の７市町
渡島	北斗市、木古内町、八雲町、長万部町の４市町
檜山	厚沢部町、乙部町、せたな町、今金町の４町
後志	余市町、仁木町、共和町、倶知安町、京極町、喜茂別町、留寿都村、真狩村、黒松内町の９町村
空知	岩見沢市、美唄市、芦別市、赤平市、三笠市、滝川市、砂川市、歌志内市、深川市、南幌町、由仁町、長沼町、栗山町、浦臼町、新十津川町、秩父別町、雨竜町、北竜町の18市町
上川	旭川市、士別市、名寄市、富良野市、鷹栖町、当麻町、愛別町、美瑛町、上富良野町、中富良野町、南富良野町、占冠村、剣淵町、美瑛町の14市町村
留萌	小平町、苫前町、羽幌町、初山別村、遠別町、天塩町の６町村
宗谷	幌延町、稚内市、浜頓別町、中頓別町、枝幸町の５市町
オホーツク	北見市、網走市、紋別市、大空町、美幌町、津別町、斜里町、小清水町、置戸町、佐呂間町、遠軽町、湧別町、滝上町、興部町、西興部町、雄武町の16市町
胆振	室蘭市、苫小牧市、登別市、伊達市、豊浦町、洞爺湖町、厚真町、むかわ町の８市町
日高	日高町、平取町、新ひだか町、浦河町、様似町の５町
十勝	帯広市、音更町、士幌町、鹿追町、新得町、清水町、芽室町、中札内村、大樹町、広尾町、幕別町、池田町、豊頃町、本別町、足寄町、浦幌町の16市町村
釧路	釧路市、釧路町、厚岸町、標茶町、弟子屈町、鶴居村、白糠町の７市町村
根室	根室市、中標津町、標津町の３市町
合計	122市町村

＊２　北海道開拓の村解説シート「移住」2021年８月１日より作成

表２　道内市町村の姉妹都市（開拓にかかわるもの）

	道内市町村	本州提携先	交流内容	開拓移住の経緯*4
1	伊達市	宮城県柴田町	歴史友好都市　1988/５/30	明治３年（1870）旧仙台藩柴田家の一部が入植
2	同	宮城県亘理町	ふるさと姉妹都市　1981/４	明治３年旧仙台藩亘理領主伊達邦成ら250人が入植
3	同	福島県新地町	同　1982/７	明治３年旧仙台藩の人々が入植
4	同	宮城県山元町	同　1988/４	同
5	芽室町	岐阜県揖斐川町	友好都市　2006/５　芽室岐阜県人会、ふるさと訪問ツアー	明治29年（1896）旧坂内村から岐阜団体が入植
6	岩見沢市	山梨県南アルプス市	姉妹都市　2004	明治27年（1894）旧鏡中条村出身の北村雄治ら130人が入植
7	釧路市	鳥取県鳥取市	姉妹都市　1963/10/４	明治17年（1884）～18年鳥取士族105戸513人が釧路市に入植
8	札幌市白石区	宮城県白石市	友好都市　1976　中学生の主張発表会交流　夏祭りへの参加	明治４年（1871）旧仙台藩白石城主片倉家伊達景範ら62戸、その後佐藤家老ら600人が入植
9	赤平市	石川県加賀市	友好都市　1995/10/10	明治28年（1895）加賀団体が入植
10	帯広市	静岡県松崎町	開拓姉妹都市　1978/５/20	明治16（1883）年松崎町出身依田勉三のら晩成社13戸27人が入植
11	登別市	宮城県白石市	姉妹都市　2015/５/18　青少年スポーツ交流や物産交流、小中学生相互訪問	明治２年（1869）旧仙台藩白石城主片倉邦憲らが旧幌別村に入植
12	苫小牧市	東京都八王子市	姉妹都市　1973/８/10	寛政12年（1800）原半左エ門ら八王子千人同心100人が勇武津、白糠に入植
13	北見市	高知県佐川町	姉妹都市　1988/11/６	明治28年（1895）土佐開拓団が常呂に入植
14	同	高知県高知市	姉妹都市　1986/４/28	明治30年（1897）北光社が北見に入植
15	同	岐阜県大野町	友好都市　1988/10/３	明治30年（1897）旧稲富村の岐阜集団21戸が常呂に入植
16	北広島市	東広島市	姉妹都市　1980/７/19	明治17年（1884）東広島市出身の25戸103人が入植
17	名寄市	山形県鶴岡市	姉妹都市　1996/８/１	明治33年（1900）東栄村（旧藤島町）から太田豊治ら入植
18	真狩村	香川県観音寺市	姉妹町村　1991/10/19	明治28年（1895）神原弥吉ら入植。大野原町からも入植
19	沼田町	富山県小矢部市	姉妹都市　2001/８/24	明治27年（1894）開祖沼田喜三郎ら18戸が小矢部市から入植

	道内市町村	本州提携先	交流内容	開拓移住の経緯*4
20	浦河町	熊本県天草市	友好都市　2015/ 3	明治４年（1871）畜産の先駆者本巣万太郎ら21戸90人が旧河浦町から入植
21	音更町	岩手県軽米町	姉妹町　1985/10/31	明治13年（1880）開祖大川宇八郎が軽米町から入植
22	浦臼町	高知県本山町	友好都市　1999/ 2 /27	明治26年（1893）武市安哉が樺戸村に開いた聖園農場に本山町から入植
23	新十津川町	奈良県十津川村	母村交流　2017/ 8	明治22年（1889）10月、８月の水害被害者600戸3000人が十津川村から入植
24	せたな町	愛知県豊山町	友好都市　2019/11/14	明治26年（1893）豊山町から入植
25	上富良野町	三重県津市	友好都市　1997/ 7 /30	明治30年（1897）田中常次郎ら三重団体が旧安藤村から入植
26	大樹町	福島県相馬市	姉妹都市　1983/ 3 / 3	明治20年（1887）相馬市から石坂へ入植
27	中頓別町	広島県大崎上島町	姉妹都市　1990/10	明治37年（1904）開祖楢原民之助が大崎上島町から入植
28	木古内町	山形県鶴岡市	姉妹都市　1989/ 4 /27	明治18年（1885）～19年旧庄内藩士105戸が鶴岡市から入植
29	新得町	山形県東根市	友好都市　1994/10/31	明治32年（1899）村山和十郎ら13戸が旧高崎村から入植
30	比布町	滋賀県湖南市	友好交流　2004/12/ 4	明治28年（1895）谷定徳ら20戸が旧下田村から入植
31	訓子府町	高知県津野町	姉妹町　2001/ 5 / 8	明治30年（1897）北光社の澤本楠弥ら400人元山村から入植
32	当別町	宮城県大崎市	姉妹都市　2000/10/12	明治５年（1872）旧仙台藩旧岩出山出身伊達邦直ら161人当別町に入植
33	豊頃町	福島県相馬市	姉妹都市　1983/ 3 / 3	明治30年（1897）二宮尊親（尊徳の孫）の興復社180戸が豊頃町に入植
34	本別町	徳島県小松島市	友好都市　2001/ 6 / 1	明治30年（1897）東條儀三郎ら旧立江村から勇足に入植
35	羽幌町	富山県南砺市	友好都市　1979/ 9 /11	明治29年（1896）旧平村から40戸が入植
36	苫前町	三重県桑名市	友好町　1981/ 9	明治29年（1896）旧長島町から28人が入植
37	八雲町	愛知県小牧市	友好都市　1986/10/24	明治11年（1878）尾張徳川家藩主慶勝の指導下、11戸56人が小牧市などから入植
38	新ひだか町	兵庫県洲本市	姉妹都市　2007/ 5 / 6	明治４年（1871）静内開祖の洲本藩家老稲田邦直ら546人が春立に入植
39	同	徳島県美馬市	姉妹都市　2011/11/25	同　稲田家旧家臣ら旧脇町から入植
40	同	兵庫県南あわじ市	姉妹都市　1990/ 9 / 9	明治18年（1885）渡辺伊平ら53戸168人が旧西淡町から旧静内に入植
41	同	岩手県葛巻町	友好都市　1983/ 6 / 3	明治初期～中期、旧三石町延出地区に入植
42	同	新潟県糸魚川市	友好都市　1983/ 6 / 3	同、旧能生町から旧三石町港町、越海町に入植
43	同	福井県大野市	友好都市　1983/ 6 / 3	明治23年（1890）林孫右衛門ら８人が旧三石町歌笛、河上地区に入植
44	遠軽町	京都府綾部市	友好都市　2008/ 2 /23	大正９年（1920）遠軽町の植芝盛平は綾部市に移住
45	同	和歌山県田辺市	友好都市　2008/ 2 /23	明治45年（1912）植芝盛平ら紀州開拓団54戸80人が旧白滝村に入植
46	同	茨城県笠間市	友好都市　2008/ 2 /23	昭和17年（1942）植芝盛平は東京から旧岩間町に移住
47	由仁町	愛知県碧南市	姉妹都市　1988/ 4 / 5	明治28年（1895）碧南市出身の加藤平五郎ら19人が三川地区に入植
48	余市町	福島県会津若松市	親善交流都市　2015/10/14	明治４年（1871）旧会津藩士宗川茂友ら193人が余市へ入植

＊３　ブログ「くにとりサーチ」2020年３月１日版に加筆　　＊４　市町村ホームページ、財界さっぽろ社長ブログ参照

３　開拓を縁とする姉妹都市交流の事例紹介

⑴　旧仙台藩からの移住

伊達市は、明治３年旧仙台藩柴田家中らが入植した縁で宮城県柴田町と友好都市を、また、旧仙台藩伊達邦成家老常盤新九郎の指導で入植した縁で、宮城県亘理町、福島県新地町、宮城県山元町とふるさと姉妹都市を締結し、産業、教育、文化、スポーツ交流を続けています。

札幌市白石区は、明治４年旧仙台藩白石城主片倉家家老佐藤孝郷らが入植した縁で、宮城県白石市と友好都市を締結し、中学生の交流や夏祭り交流を続けています。

登別市は、明治２年旧仙台藩白石城主片倉邦憲らが幌別村に入植した縁で宮城県白石市と姉妹都市を締結し、スポーツ・物産交流、小中学生の相互交流を続けています。

当別町は、明治５年旧仙台藩岩出山の伊達邦直らが入植した縁で、宮城県大崎市と姉妹都市を締結し教育・文化・産業交流を続けています。また、最近大崎市の道の駅、「あ・ら・伊達な道の駅」にて、当別町に拠点を持つチョコレートメーカーのロイズが常設店を開設したことで話題となっていますが、これも開拓ヒストリーの絆による新たな交流の一例と言えます。

⑵　静岡県松崎町から帯広市への移住

帯広市は、明治16年伊豆松崎町出身の依田勉三が率いる晩成社が入植した縁により、開拓姉妹都市を締結し、小学生の相互交流や特産品の相互配布を行っています。市内には開祖依田勉三の銅像が建てられています。

⑶　高知県、岐阜県から北見市への移住

北見市は、明治28年土佐開拓団が常呂町に入植した縁で、高知県佐川町と姉妹都市を、また明治30年北光社が北見市に入植した縁で、高知県高知市と姉妹都市を、さらに、明治31年岐阜開拓団が常呂町に入植した縁で、岐阜県大野町と友好都市を締結し、交流を続けています。

上記の３例以外にも、開拓ヒストリーを契機とした道内の30市町村と本州各地との交流が続けられています（表２）。

4　北海道の観光活性化に向けて

これまで、北海道の開拓ヒストリーの一部を見てきましたが、まだまだ道内外の市町村の郷土史に埋もれている開拓ヒストリーは数多くあると思われます。これらを掘り起こし、データとして取りまとめ、全国に発信することによって新たな姉妹都市交流拡大につながることが期待されます。

北海道の観光を活性化する新たな方策として、唯一無二の開拓ヒストリーの絆を生かした姉妹都市交流の拡大を提案します。

これにより、北海道の観光入込客数の増加、ふるさと納税の増加、移住促進などの経済波及効果が見込まれ、特に後の２つはインバウンド客の増加にはない効果であり、北海道の経済拡大に大きく貢献するものであります。

表２にまとめたような国内姉妹都市のデータは、現在民間調査に基づくものしかなく、公的機関のデータはインバウンドによる国外都市のみに限られるといった偏った現状を、北海道から変えていく必要があります。

まず道内市町村に対して、開拓の絆に基づく交流要望の調査を実施したうえで、国、道は必要な支援策を講じていくことが必要です。

現在、北海道開発局では第９期北海道総合開発計画において、北海道の強みの一つである「観光」を一層強化するための施策を推進しています。また、国土交通省観光庁では、これまで横ばい傾向であった国内旅行市場の需要を拡大に転じさせるために、「新たな交流市場・観光資源の創出事業」を令和４年度から継続しており、令和７年度も376百万円の予算をもって「第２のふるさとづくりプロジェクト」などを推進しています。北海道の歴史資源である開拓ヒストリーを生かして、この第２のふるさとづくりへ積極的に参画し、新たな交流人口の創出により観光経済の活性化を図っていくことも一つの方策と考えられます。

最後に、本文をまとめるに当たって開拓に関する資料をご提供いただいた、北海道開拓の村館長　中島宏一氏に謝意を表します。

＊１　国土交通省北海道運輸局、北海道の観光基礎データ　令和７年４月30日
＊２　北海道開拓の村、解説シート「移住」2021年８月１日
＊３　くにとリサーチ　2020年３月１日
＊４　市町村ホームページ、財界さっぽろ社長ブログ

お知らせ❶

(一財)北海道開発協会

令和8年度 地域活性化活動助成募集のご案内

（一財）北海道開発協会では、このたび令和８年度の地域活性化活動助成にかかる活動を募集しています。助成の概要は下記のとおりです。

記

●対象とする活動

非営利の市民団体が道内で実施する地域づくりの企画、推進または実施の活動で、以下の項目全てに合致しているもの。

＊地域の発展に貢献するもの
＊地域の特性を生かすもの
＊他の地域、民間活動のモデルとなるもの
＊活動の継続性が見込まれるもの

●申請の方法

地域活性化活動助成募集要領に基づき、所定の申請書に必要事項を記入の上、添付書類をあわせて下記の期限までに提出ください。
なお、地域活性化活動助成募集要領および申請様式は、下記の宛先までご請求いただくか、（一財）北海道開発協会のホームページからダウンロードしてください。

●申請受付の期限

令和８年４月20日（月）（当日消印まで有効）

●助成額

１団体当たり１件、70万円を限度として選考により助成を行います。

申請書の提出とお問い合わせ先

住　　所	〒001-0011　札幌市北区北11条西２丁目　セントラル札幌北ビル
宛　　先	一般財団法人北海道開発協会　開発調査総合研究所　研究助成担当
お問い合わせ	電話　011-709-5213　　FAX　011-709-5225 担当：中川、曽田 E-mail：kenkyujo@hkk.or.jp
当協会のURL	https://www.hkk.or.jp

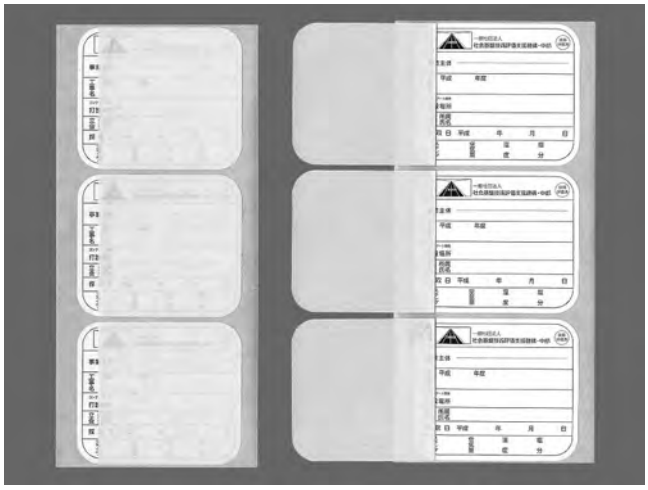
一般財団法人北海道開発協会　開発調査総合研究所

お知らせ❷

（一財）北海道開発協会（委託販売商品）

「コンクリート供試体確認版」のご案内

品質証明シール（１シート３枚綴り）396円



発送をご希望の場合

・当協会のホームページ（https://www.hkk.or.jp）より注文フォーマットを印刷し、会社名、商品名等を記入のうえ、FAX（011-709-5225）で送信願います。
送料は道内一律770円（税込）。離島及び道外は着払いとさせて頂きます。

・代金は、銀行振込又は現金書留でご送金願います。

銀行振込の場合

下記の口座に合計金額（商品代金＋送料）をお振り込み願います。

北洋銀行北７条支店　　普通口座　3195695　一般財団法人北海道開発協会

北海道銀行札幌駅北口支店　　普通口座　0303761　一般財団法人北海道開発協会

※商品は、入金確認次第発送いたします。

発送を急がれる方は、銀行の「振込証明書」と注文書をFAX（011-709-5225）で送信願います。

現金書留の場合

下記の宛先に注文書を同封のうえ、合計金額（商品代金＋送料）を郵送願います。

〒001-0011　札幌市北区北１１条西２丁目セントラル札幌北ビル1階

一般財団法人北海道開発協会

販 売 元　：　一般社団法人中部地域づくり協会
TEL　052-962-9086

委託販売　：　一般財団法人北海道開発協会
〒001-0011　札幌市北区北11条西２丁目セントラル札幌北ビル
TEL　011-709-5212　FAX　011-709-5225

お知らせ

研究所だより

最近は、ほっかいどう学を始めとして、学生や生徒が歴史や文化など地域のことを学ぶ機会が増えてきたように感じます。筆者が、学校に通っていたのは大昔です。全国一律の教育の下で「春に咲くのは、ソメイヨシノ」と習ったため、もとより花というものへの関心が薄かったこともあって、長くエゾヤマサクラもチシマザクラも知りませんでした。北海道には弥生時代がなかったことも、教科書には書いてありませんでした。

今、地元のことを学ぶ動きが進んでいるのは、勿論（もちろん）、その学びの大切さへの理解が浸透してきたこともありますが、筆者は、人口減少も影響しているのではないかと考えます。昔は子どもも沢山いたので、その中から就職などで都会に出ていく例があっても、地域を支える若者も一定程度は残った。けれども、今では少ない子どもが都会に出て行ってしまうと地域には誰も残らなくなってしまうから、そうならないように、地域の子どもたちが故郷を理解し、愛するというための教育を行う、そんな側面がある気がします。

将来の地域を背負って立つ若者を増やしていくために、地元を学ぶことはこれからますます重要になっていくのではないでしょうか。

今月から新年度。新入生にも、いろいろなことを学んでほしいものです。　（目黒）

国営滝野すずらん丘陵公園

4月19日(日)～11月10日(火)

ノルディックウォーキング100kmコンペ

グリーンシーズン期間中通算で100kmウォーキングを目指すコンペを開催しています。達成者には賞状などの記念品を進呈します。自然豊かな園内を健康づくりや運動不足の解消に歩きましょう。

- ●参加費　無料（入園料・駐車料金は別途）
- ●場　所　受付場所：案内所、東口ゲート、森の交流館
- ●時　間　9:00～17:00

※詳細は当公園ホームページ（URL：http://www.takinopark.com/）をご覧いただくか、滝野公園案内所（011-592-3333）までお問い合わせください。

●「開発こうほう」へご意見・ご感想をお寄せください。
（一財）北海道開発協会広報研修出版部
〒001－0011
札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル
電話 011（709）5212
e-mail:pr@hkk.or.jp
●「開発こうほう」は、北海道開発協会のホームページでもご覧になれます。

●（一財）北海道開発協会では、賛助会員を募集しています。詳しくは、ホームページをご覧ください。

開発こうほう　第752号　令和8年4月1日発行
発行　（一財）北海道開発協会
印刷　（株）須田製版　不許複製
https://www.hkk.or.jp/

業務内容

- 土木工事全般
- 道路維持管理業務
- ＴＶカメラ調査・管更生
- 除排雪業務
- 排水構造物清掃
- 産廃物収集運搬及び中間処理

HRM HOLDINGS GROUP

HRM HOKKAIDO ROAD MAINTENANCE

北海道ロードメンテナンス株式会社

本　　社	〒060-0031	札幌市中央区北１条東12丁目22番地48	TEL (011) 241-1692	FAX (011) 241-7774
真駒内事業所	〒005-0861	札幌市南区真駒内52番地	TEL (011) 592-6512	FAX (011) 594-2258
発寒事業所	〒063-0835	札幌市西区発寒15条12丁目１-25	TEL (011) 665-3259	FAX (011) 665-8447
北見事業所	〒099-0878	北見市東相内町110番17	TEL (0157) 36-9811	FAX (0157) 36-9812

h-rm.co.jp/

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

各種施工管理技術検定試験　販売図書のご案内

土木施工管理技術テキスト 改訂第4版（2冊函入）

7,920円（税込）

1･2級共通のテキスト

1級土木施工管理 第一次検定 問題解説集 2026年版

4,290円（税込）

過去7年分（R7-R1）の過去問解説

1級建築施工管理 第一次検定 問題解説集 2026年版

4,510円（税込）

過去8年分（R7-H30）の過去問解説

1級電気工事施工管理 第一次検定 問題解説集 2026年版

4,290円（税込）

過去8年分（R7-H30）の過去問解説

販売窓口（8:30～17:00　土日祝日を除く）
お問い合わせ先
〒001-0011　札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル
一般財団法人北海道開発協会　広報研修出版部
TEL:011-709-5212 FAX:011-709-5225 https://www.hkk.or.jp/syuppan/

地域開発研究所

【発行元】
施工管理技術検定対策ひとすじ半世紀
一般財団法人 地域開発研究所
TEL 03-3235-3601
FAX 03-3235-3612

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

一般財団法人 北海道開発協会
〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル
TEL（代表）011-709-5211